
I s a y U (上)

森本 誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I s a y U （上）

【Nコード】

N 4 8 4 8 D

【作者名】

森本 誠

【あらすじ】

一身上の都合により大神莉華（おおがみりかAV女優・香々美織緒（かがみおりお）をつつた、主人公・森本誠（もりもとまこと）。その後間もなく、近い将来死ぬ運命にある女子高生・末松紗唯（すえまつさゆい）に出逢う。不運に弄ばれながらも幸運を信じるミドルティーン。運命にからかわれているから神を信じない三十路前。ふたりの恋の行方は……？性と死をテーマに、自称・口語文学の旗手がギャグ満載でおくる感脳&官能的感動巨編！えろくてせつない、ファーストラブストーリー！。

E p i l o g u e

スタート

W i n d o w s の 終 了

電源を切れる状態にする

O K

文書1は変更されています。保存しますか？

「大好きなマコっちゃんと」

C l i c k

W i n d o w s を 終 了 し て い ま す

.....プッ。

アフロディーテ

最初に付け加えておくが　おれは無神論者だ。
生粋きっすいの、ってわけじゃなく……基本的に。

神を全否定しているわけじゃなく、それが願いを叶えてくれる存在として人の心に君臨すると考えられていることに異を唱える。

そういった意味では、無信論者と書いたほうが正確かもしれない。信仰がないおれは、アヤしい宗教団体にハマる心配はないだろう。それでも、ずっと期待していた。

何かがおれを……おれを取り巻く環境が変わってくれることを。愛と美の女神に嫌われていることは　生まれた瞬間から、既にわかっていたことだ。

今さら驚くことじゃない。

ただ……こんな悪戯いたずらをされるとは、予想だになかった。失恋が、これほど虚しいものだなんて……いっそのこと、恋心なんて芽生えないままでいたほうが、幸せだったのかもしれない。

……だから神は、お節介にも叶わぬ恋をプレゼントしてくれたのか。

孤独は、淋しくはなかった……と言ったらウソになる。

しかし、耐えられないほどじゃなかった。

女のいない人生を歩むことに抵抗はあっても、人生の全てが女ではないと割り切れていた筈はずだった。

そう　女のいる人生の素晴らしさを知る機会さえ訪れなければ……。

恋愛は、依存症だ。一度でもハマると、一生抜け出せない。

気付かなきゃ幸せなことなんて、世の中には沢山たくさんある。

この不況だって　数字にしか目が向いていないから、開示された情報の全てが絶望的に感じるんだ。

殆どほとんどの国民が本質を理解していないから、何も改善されない。

暗愚な人間が……ちっちゃい人間が、背伸びをするもんじゃない。世の中には、変われる人間と変われない人間がいる。肉体じゃなく、精神面で。

それは先天的性質であって、環境によるものではない。自分が変わる切っ掛けになった恩人と出逢えた人には、元々変わる素質が備わっていたということになる。

素質のないやつにはそういう出遭いが訪れないか、若しくは……誰かに影響を与えるような偉人に出会っても、その凡人に魅力を感じないかだ。

「自分が変わらなければ、周囲の評価は変わらない」

そういうセリフを簡単に吐ける人間には、変われないマイノリティの心を動かすことはできない。

……何をやっても無駄だ。
運命は変えられない。

今の自分が嫌いで、変わりたいのに 現時点において変われないやつは、自分がいつか変われる人間であると思い込むことしかできない。

思うことを忘れなければ、まだ救いはある。
と、思い込んでいる。

だからおれも、そっち側の強い人間だったらいいなあと思って……こんなおれが、求めるべきじゃなかった。

宝石屋にとっては【いいお客様】になったかもしれないが……。嘘か真か、誰にでも人生には3回、モテ期なるものが用意されているらしい。

とりあえず1回……と半分くらいは、こんなおれにも例外なくやってきた。

モテ始めたのは、ダイヤモンドを手に入れてからだだな。
IFだとかハート&キューピットだとか……価値が全くわからないが、これだけは何となくわかる。

「女の大半は、宝石や貴金属が好き」

後悔の元凶は、そこにあるのかもしれない。

取っ掛かりにミテクレだけでもと思い、貴顕紳士きけんしんしを装よそめってはみたものの……見掛け倒しに終わった。

変革の第一歩のつもりが、右足も左足も動かなかった。

前のめりで倒れて顔面強打するほど、気持ちだけが前進しようとすることもなかった。

十六トム&ジェリーの普通預金通帳には、著いちじゅうしい数字の変化が見られたのだが……。

自分は変わろうとせず、おれを認めてくれる女が現れるのを……ただ待っていた。

そんなおれの前に、理想の女が現れること自体が間違いだったんだ。

疑うべきだった。

そうすれば、おれのキズは　カサブタすらできない、かすり傷程度で済んでいたかもしれないのに。

……甘かった。

おれが前世で犯したであろう罪は、裁判長の裁量で定められた時間が解決してくれるものだと考えていた。

初めて告白されて　女子とクラスメート以上の付き合いがなかった27年8ヶ月が、おれの刑期だったのだと。

……あまちゃんだった。

おれは未だ、許される運命さだめにないらしい。

順序的には、恋愛感情が生まれた後にセックスへ　という流れだ。

例外を除けば、の話だが……。

セックスが先なら、こんなに想いを引き摺ることはなかっただろう。

中途半端な大恋愛には、決して発展しないから……。

日本人として生まれたのも、きつと運命だ。

英語圏の人間は「Iの前にはHがある」と言うかもしれない。

こんなバリバリの日本語でじゃなく、流暢なアルファベットを用いて。

けど、おれは典型的な現代日本人だけに「アイから始まります」と、円楽さんから座布団1枚もらえるくらいの上手いことを言える。性病を飼っていることを自覚しているにも拘わらず、遊び感覚で伝染し捲れるアホなコギヤルのような図太い神経は、おれにはない。おれの心臓が宅急便で運送される時には、間違いなく【ワレモノ】のシールが貼られる筈だ。

とにかく……おれの心は、それくらい繊細だ。

お粗末な程に翻弄されるおれを、神々は天空から俯瞰して嘲笑っているに違いない。

他に目を向けるべき事態が、今この瞬間に世界中で起こっているだろうに……。

彼らの暇潰しの対象として 実らない奇蹟は、残されたおれの余生で……また何回か訪れるのだろうか？

おれのほうから求める可能性は、限りなくゼロに近い。

この喪失感、少なくとも……今年いっぱいにはヒキズリそうだ。

シーマン

失う物が、増える傾向にあるらしい。

と言うか、それが前兆だったのかもしれない。

このエピソード自体は……デキなかったコト以前の出来事だ。

TVがイカれた。

白石美帆のエクボに見惚^{みと}れていたら、急に画面が落ちた。

84年製じゃ、もう寿命だ。

18年なら、よく持ったほうだと思う。

ノーテレビデーで5日間生活したが、あまりにも暇で就寝時間が早くなるため、新調した。

おれが自分で金を出して家電を買うのは、この時が初めてだった。小学校から付き合いのある田中且行がエイデンのポイントカードを持つていることを思い出し、加算してやると言って誘い出した。

おれは基本的に、1人でショッピングするタイプの人間だ。

時間の自由が利くし、他人の意見を気にしなくて済む。

その時も……そうすれば良かった。

デザイン重視のおれに、自称カリスマフィッターは「同じ値段なら大きいほうがいい」と言って、別の商品を勧めた。

店員のおっちゃんよりも積極的で……店員のおネーちゃんに対しても積極的だった。

なかなか決まらなくて、気分転換も兼ねてパソコンのブースに入った。

デスクトップを泳いでいる人面魚をクリックしたら、

「あー、ビックリした!」

こっちが吃驚した。

全く、表情変わってねえし。

面白かったウィークリーランキングベスト1が……ソレだったと思う。

半荘終わって、サイクロン式クリーナーを横目に、同じバラエティ番組だらけの映像空間に戻った。

4時間迷った挙句 第一印象の14インチを買った。

リモコンはダサイけど、本体のデザインとカラーが気に入ったから。

彎曲^{わんきょく}していないフラットのやつ。

バリアフリーの時代やから。

前の映らなくなったテレビジョンは19インチだったので、サイズ的にはコンパクトになった。

ちっちゃい良さは、ちっちゃいやつにしかわからない。

「もう二度と、オマエの買い物には付き合わない」

1000円で1ポイント 時給6ポイントの仕事は、決断力のある男にとって退屈過ぎたらしい。

しかし、それ以上の収穫があつたことを……後に誘われた合コンで知った。

あいつのリストの何番目におれの名前が載っているのか知らないが、酒が飲めないおれをどうして誘うんだろう。

素面^{しづめん}で場を盛り上げられるほど、おれは名脇役^{バイフレイヤー}じゃない。

と思いながらも、断る妥当な理由を失つたおれは、何ヶ月か振りに 確実に元の取れないワリカンを引き受けた。

ラストシーン

葬式は、好きじゃない。

陰鬱な雰囲気になることだけが理由じゃなく、近所付き合いがその時にだけ発生するから。

殆ど交流のない人たちが、まるで義務であるかのように寄り合う。村八分っぽいところが嫌い。

実際にそういう廃れた関係かどうかは、他人にはわからないが……。

親はどうか知らないが、おれ自身は近所と交流がない。

畑の裏のおばちゃんは成長したおれのことを知っているようだが、おれの古い記憶はデスクトップのゴミ箱からも削除されたかのように全く覚えていない。

根っからの八方美人を養子縁組して跡を継がせなければ、森本の家は凋落の運命を免れないだろう。

世間に対して疎隔や疎外感を持つおれには、嫡子の責務は荷が重過ぎる。

十川謙哉も長男だった。

おれと似たようなプレッシャーを感じていたかどうかわからないが……永遠に解放されて、そういう世俗的なものとは無縁の世界へ昇って逝った。

「魂には絶対数が決まっていて、それ以上増えることも減ることもない。死は終わりではなく始まりであり、新たな可能性を求めて輪廻転生を繰り返す」 現世で誰からも必要とされない命から順番に【救済】されていくのなら納得もいくが、おれの身近にある現実には、そういう説法を信じる気分にはさせない。

補完のためのステップアップとして様々な形あるモノを経由するわけじゃなくて、ただ宿主をとっかえひっかえするだけの生まれ変わりにには全く意味がない。

前世の行いがどうのこうの　一般人と同じように記憶をリセットされている生臭坊主に言われたって、何の説得力もない。

非戦争主義者の前世が快樂殺人者だってことを否定する物証なんて、何も有りやしないだろ？

結局……死んだら、それまでなんだ。

命の重さだとか寿命の長さだとか、動物だとか植物だとか　誰の裁量か知らないが、命の価値は不公平に創られる。

唯一の平等は、全ての生命体にそれぞれ一度だけ生と死が訪れるということだ。

人間として生まれた聡い命は、その根源を当然とは認めず、欲張って哀しむ。

親や親類が親や親類として存在することは、偶然に過ぎない。

お互いが望んで他人ではなくなる関係こそが、自由に選択できる必然だ。

あの場所で涙を流す権利があるのは、人生の伴侶になる予定だった五十川忍だけだと思う。

涙腺が鈍感なおれは、そう思うことで自分を肯定しようとする。

こんなヒネクレモノのおれが死んだ時でも、形式的な儀式に参加してくれる人はいるだろうか？

まだ生存している他の幼馴染みに、ナンボ包むか相談している……

…自分が嫌い。

1 章（前書き）

D
i
e
e
a
r
l
y

D
i
a
l
y

1
章

ペーパーウェディング

親父と仲のいい年頃の娘　それが異常だと感じるのは、テレビなんかから入ってくる情報の影響もあるが……結局、おれが捻^{ひね}くれた人間だからだろう。

と、素直に非を認めることができなかったのは……その父娘が、一般家庭とは異質の苦悩を背負っていたからだ。

援交やってて性病持ってて、しゃべればタメ口、意味不明。風呂に入らず、パンツも替えない、くっさいくっさいヨゴレギヤルどこからソースされたのか、普通の女子高生に対するおれの見解は、以前と全く変化がない。

末松紗唯は特別だ。

いや……他の女なんてどうでもいい。

今は……そう思わなきゃ、失礼だ。

仕事としては成立していなくても、自己満足のレヴェルで自己表現する人たちのことを、最近ではアピーラーと呼ぶらしい。

……アピーラーじゃない人間なんているのだろうか？

自分を伝えたいというのは人間の素直な欲望だ。

やりたいことが何もないと言って現実に存在することを絶望している人は、結局のところ自己欺瞞^{きまん}だと思う。

自分の世界を侵されるのが恐くて周りに評価されるのを恐れてるから口に出さないだけで、誰にだって……おれにだって、やりたいことはある。

とにかく……自分の娘を含め、そういう人たちのために自己表現の場を与えてやりたいという親心が　おれにとっては、今年二度目の奇蹟の始まりになった。

当然のことながら、奇蹟にはそれなりのインフラが不可欠で、でき過ぎたマグレを感じることが、最近では多々ある。

岐阜の親父と岩手の母親が、どういいうわけか出会ってしまった偶

然から話し出したら限がないが……必然だなんて思いたくないことよりも、そっちのほうが量的には多い。

質的には、全くお話にならない。

磐田に住んでいた末松忠が、妻の故郷である名古屋にその拠点を築こうと考えたことも、おれにとっては奇蹟的な偶然で……天国にいる紗唯の母親にも感謝しなければならぬ。

おれが今の会社で働いているのも、高3の時クラスメートだった織田信乃のおかげで……感謝すべき対象が多過ぎる。

素直じゃないおれが、その気持ちを口に出して言うことはないだろうが……。

物件の仲介をする仕事は、人と出会う機会が多い。

利潤を生むためには【幅広く】が重要で、浅い深いはどうでもいい。

より深いほうが拡がる可能性が高いような気がするが……残念ながら、そういうものでもない。

寧ろ 深入りすべきではない。

恋と呼んでいいものかどうか分からないが……初めての失恋で、おれは自分がいかに脆弱であるかを悟った。

客は女ばかりじゃないし……可愛いコばかりでもない。

だから、身のほどを知らず面食いなおれが、客と恋愛関係になることは極めて稀で 頭ではわかっていても、昔と比べて心は随分と消極的になったと思う。

古い客 とは言っても、半年程度の付き合いだが……彼らには、以前と変わらない対応で努めているつもりだ。

アピラー支援計画の概要を聴いたおれは、真っ先に名前が浮かんだ 大家平と末松忠を引き合わせた。

似たもの同士と言うか……あっさりすんなり、対談は集約した。

……酒が入る大分前に。

そして、本契約の今日 公休日なんておれには関係ないが……

文化の日の振替休日に、末松忠は最愛の娘を連れて来た。

契約後、速攻で新台に誘われた大人たちは 13時を過ぎても帰ってこなかった。

探しに行こうかと思ったが、充滿した煙草の煙と臭い臭いにスーツを侵されなくなかったので、昼メシは二人で摂ることにした。アプローチに出て、パチンコ屋とは真逆の方角を向くと おれの短いストライドでも1分と要しないくらいの距離に、安価の匂いを漂わせるオレンジ色の看板が見えた。
「食べたことがないから食べてみたい」

助かった。

……いや、助かる見込みは。

今が【3食食べると1杯タダになるフェア】じゃなかったのが残念だった。

正式名称はそんなじゃなかったと思うが……アレは重宝する。

ひとりで外食する時のヘビーローテーションだった。

因みに、おれは吉牛で「並」としか注文したことがない。

そんなこととは比べものにならないくらい……残念という言葉では表現できない。

吉野家は混んでいた。席が空いてなかったので、テイクアウトにした。バリバリの和食なのに「TAKE OUT」って言うのもなあ……。

中途半端に西洋かぶれつても、日本文化っちゃあ日本文化っぽい。

器が丼じゃないから牛丼と呼ぶべきじゃないのかもしれないが、味に大差はないと思う。

喩えあつたとしても、おれはグルメじゃないし……。

待っていれば【早さ】を、少しくらいは感じなくて済んだかもしれない。

「15かあ……若^{わけ}えな」

「今年、6」

「じゃ、ちょうどひと回り違うんだな」

「いくつ？」

「今年、8。キティちゃんとタメ」

「12コ違いだよ」

「だから、ひと回りだろ？」

「ひとまわりって、10歳じゃないの？」

「干支がひと回り」

「へーえ」

「寅だろ？」

「わかんない」

「寅だよ」

「ふーん」

ホントに……「不運」としか、言いようがない。

トラはネコ科だ。

プロフィールの身長と体重がリングで表記されているキティちゃんも、たぶん。

そんな繋^{つな}がりか……牛を買った後の帰り道 狭い路地^{ちやうど}に続くその脇に、行きには見掛けなかったダンボールの箱が置いてあった。

上部の蓋を3枚を折り目から切り取って、残りのひとつを思いっきり外に折り曲げ、そこに桃色のマジックで「じゅりあーのちゃんはいーこなのでいーひとがもらってください」と綴^{つづ}られていた。

稚拙^{ちせつ}な文字に……切なる想いを感じた。

「頼んでやろうか？」

しゃがみ込んだ背中におれは声をかけたが、首を横に振って、紗唯は小さめのシヨルダーバッグからポケットサイズのデジカメを取

り出した。

「さみしいでしょ？　すぐママがいなくなったら」

細い指が、か細い声を写した。

「紗唯、もうすぐ死んじゃうんだ」

答えは　早かった。

おれが言葉の裏の意味を考える必要もなく……早過ぎると思った。
オリnpasを仕舞い、立ち上がって振り返った。ピンクの唇は、精
一杯に大人を演じようと……そのフレーズは、仔猫の哀訴よりも純
粋に、おれの薄っぺらな胸に射した。

好きになったら、迷惑ですか？

11月4日　恐らく1周年記念すら一緒に祝えないが……おれ
と紗唯は、出逢った。

ビギナー

携帯電話を耳に近付けると、電波の所為か気分が悪くなるらしい。それが切っ掛けで、アナログだったこのおれも遂に「携帯する受話機」から「ケータイ」に切り替えた。

家の電話は相も変わらず、未だに黒電話だが……。

おれが初めて買った（って言っても、本体はタダなんだけどね）IDO時代のcdmaOneは、強制的機種変更の対象にはなっていないから……auに機種変しても有料になっちゃう。

Cメールしかできない機種では遠く離れている紗唯と話することができない。

ノートパソコンでもメールアドレスを取得していないし、Cメールすら一度も使ったことがないおれが、携帯を替えたからっというてメール機能をすぐに使いこなせるとも思えないが……必要に迫られる状況下にある今なら、きっとこれからのグローバルスタンダードに馴染むことができるだろう。

今売り出されている携帯の中で、メールの保存数が一番多いという理由で D504iを買った。

ケチなはずのおれが、30ヶ月使用して貯めた割引ポイントを捨てて……信じられない。

最初のアルファベットはメーカー名を表していて、Dは三菱のことらしい。

三つの菱形をダイヤモンドに見立てて、その頭文字のDだそうだ。どうしてMじゃなくてDなのかと店員に訊くと、また同じセリフが返ってきた。

「ですからね、お客さん」

おれが訊きたいのはそんなことじゃなくて……まあいい。それを知ったところで、おれがミツビシサー（おれ造語…三菱をこよなく愛するユーザーの総称）になるわけでもねえし……。

価格でもデザインでもなく、機能性オンリーで即決する買い物なんて……まあ、デザインはそこそこいいんだけどね。

こんなスピーディなショッピングは、今までの優柔不断なおれでは考えられない。

田中且行には、申し訳なく思っている。

Y A H O O ! キャンギヤルとの談合の隙ひまを与えなかったから……。

電波という様式は、いろいろと障害がある。

ペースメーカーに支障を来す恐れがあるからここは駄目とか……。

だから、電波に代わる全ての人に無害な【何か】が発見されなければ、本当の意味での癒しは訪れないんじゃないだろうか？

殆ど活かせない機能を追加するのもいいが、特定の人に便利なのではなく、バリアフリーツールとして安心して誰もが利用できるケータイを追求することこそが、賞讃しょうさんされるべき叡智えいちである。

関係者各位 健闘（検討）を祈る。

こんな小さな商品なのに、どうして取扱説明書はこんなにも分厚いんだ？

そう感じるのは、やはり今のおれにとって、どうでもいい機能が備わり過ぎているからだろう。

カメラが付いてたら、もっとページ数が多いんだろうなあ、きつと。

全機能を使いこなせるまでは、携帯電話の取扱説明書を携帯しなければならぬ。

……何とも理不尽な。

おれはただ、紗唯とスムーズに【会話】がしたいだけなのに……。トリセツも然^さることながら、悩みに悩んで……。これは優柔不斷な性格とは何の関係もなく、おれに文才がないだけの話で……。漸^{おしな}く、自分の名詞の裏に手書きで控えておいたアドレスにメールした。購入してから……。4時間が経っていた。返事は 早かった。

^o^

11月5日 おれの人生初メールは、クロヤギさんに食べられることなく……。送信も着信も、無事に届いた。

ファミリー

内装の打ち合わせ等々……平成6年式のカローラを運転して、末松忠が磐田から下道でやって来た。

当然のことながら、紗唯を助手席に乗せて。

途中で脇見渋滞（すれ違いざまに事故現場を見物するため、スピードを緩めることによって生じる渋滞）に巻き込まれたそうだが……

……1週間記念は、滞りなく迎えることができた。

ちゃんと毎日下着も替えるし、シャワーも浴びる　先週と同じ服装だった、そこら辺の汚ギヤルと違って、紗唯はいい匂いがした。

……この表現がオヤジ臭い。

何気に、ノネナールとか分泌してるかもしれない。

ナマ足ブーツの臭いを嗅いだことがないので何とも言えないが……
……と言うか、比較したくもない。

絶対評価だとか相対評価だとか……義務教育をとっくの昔に卒業しているおれにとっては、近年の通知表問題なんてどうでもいい話だ。

猫は、人間の7倍のスピードで老けるらしい。

20倍だとしても、紗唯より……。

ジュリアーノは、未だに　ダンボールハウスに住んでいた。

どこの世界も、景気は相変わらず横ばい若しくは悪化傾向にあるらしい。

しかし、設備投資だけは若干回復されたと言えるだろう。

まだまだ　未来は、捨てたもんじゃあない！

以前は屋根がなかったが、露天の上方でミニハムずが踊っていた。

地味な黄土色の外壁に、華やかなピンクの傘が、赤色のビニールテープで固定されていた。

ちよこつとずつリフォームが進んでいる。

「エサを与えないで下さい」と書かれていなかったのが理由かどうかはわからないが……今のところ、食うには困っていない様子だった。

出るモノも、ちゃんと出ていた。

……食前の、ちよつといい話でした。

みんなで、近くのガストでタメシを食った。

いや……おれにとつては、タメシではなくタダメシか。

ラッキーなことに、改装業者のおやつさんに奢^{おご}ってもらえた。

もつとラッキーな人は、世の中に大勢いるが……。

一昨年の今日（おとしに今日はねえけど）飲み代を出して……ベロンベロンだったらしいから、その記憶もアヤシイのだが……年末ジャンボ宝くじで1千万当たったらしく……その験担^{げんかつ}ぎだそうだがそのうちの1%が今年の軍資金に充てられ、その1割は払い戻しが確定して……とにかく、金は天下の廻りものだ。

この不況下では実感できないが……。

夢を金で買える人間が羨ましい。

おれの夢は……まあ、いい。

昨年の今日（去年にも今日はねえけど）の話はなかったから、下一桁が同じなら漏れなく貰える当籤^{とうせん}金額を受け取っただけだろう。

「ギャンブルで儲けた金は、ギャンブルに消えていく」昔、誰かが言ってた。

……停滞してるよりはマシだ。

消費レヴェルで廻る金と即効性の経済効果を考慮すれば、一人が3億円を手に入れるより百万人に3万円ずつ配ったほうが、利益主義社会にとつては有益だと思うのだが……それじゃあ、企業にとつても個人にとつても有益ではないのだろう。

金額も然ることながら、稀少^{きしやう}価値の高い僥倖^{きやうじやう}が魅力なのかもしれ

ない。

「何でも好きなの頼んでいいよ」って言われても、何でも好きなの頼める性格じゃない。

みんなが高価なステーキ系を注文する中で、おれはお手頃価格のセットメニューを指差し、店員の口に「ライスで」と言った。

ドリンクバーを奨められたが、頭をX軸方向に振った。

……一度でいいから「ミディアムで」とか言ってみたい。当然のことながら、おれの注文した料理が一番安かった。

同じ料理だから、紗唯とタイ記録だった……。

注文を済ませてから、おれと紗唯は移動した。

「大家族スペシャルみたい」

「……子供が1人じゃ、数字獲れねえな」

喫煙席の大所帯は、泡立つジョッキで盛り上がっていた。

「ママが死んでから、ずっとパパとふたりだけだったから……憧れだったんだあ、こおゆうの」

禁煙席に、コンソメスープが来た。

「再婚してくれたら、家族が増えたのに」

そのセリフの意図は、おれの【先】のことを想定したものだ。つたのか……この中途半端な認識力が、自己嫌悪の抜本塞源を**ばっほんそくげん**を不可能せしめるんだ。

大人の定義も知らずに大人になろうと **ひげ**が生え始め、チン毛がボーボーになって、調子に乗って思考力もフサフサにしようとしている。

「そうだね。家族がたくさんいると楽しいね」

って返せば、それでいいじゃねえか。

「できるわけねえよ。だって、愛してたんだぜ」

……言えるわけねえよ。だって、返しが怖いから。

まるで 2打で沈めれば優勝できる、マスターズ18番ホール
のロングパットを打つくらいの心境だ。

全然、心は鎮まりません。

家族ぐるみの付き合いをウザいと思っていたことが、結婚願望を抑制させる言い訳のひとつでもあったが……家族として受け入れられたような呼ばれ方を、今日のおれが鬱陶^{うつとう}しいと感じることはなかった。

全盛期の若乃花の半分……いや、5分の2くらいか？

めかた
目方的には。

それなのに、って言うのも変だけど……なぜ紗唯がおれのことをそう呼ぶのか　その理由を訊^{たず}ねなかったということは……おれの中にあるのは、恋愛とは違う感情なのかもしれない。

まあ、恋愛に定義なんてものはないけど……それでも、紗唯を愛しいと思う気持ちは、我ながらホンモノだと確信を持って言える。

にも拘^とわらず……全く記憶がない。

出逢^{であ}ってから今日まで　おれは紗唯のことを、どう呼んでいただろう？

「ロザミー」じゃないことだけは、確かだと思うけど……。

おにいちゃん、って呼んでいい？

11月11日　おれは「おにいさん」から「おにいちゃん」に、クラスチェンジした。

シンクロニズム

大家平は、目押しができない。

スロット歴2週間じゃあ無理もないか。

いや、経験じゃなく才能かもしれない。

おれも何回か座ったことがあるが、上から下へ流れる図柄を把握する能力に乏しいらしい。

世の中には、二種類いる。

見える者と、見えない者。

おれは、後者。

お化けから将来まで ありとあらゆるものが見えないまま、今日^{こんにち}に至る。

でも、そんなことは関係なく……素人だろうが、勝つ時には勝つ。

結局 運だけだ。

コンピューターで制御された近年のパチンコ及びパチスロは、特にその要素が強い。

30兆円産業にまで成長した業界は、射倖^{しやうじつ}心を煽^{あお}ると一時騒がれたが、娯楽性もグレードアップして「あのレアなリーチアクションが見れたから負けたけどいいや」的集団催眠で、ギャンブラーモードキどもの脳を確実に支配しつつある。

基本的にやらないおれにとっては、どうでもいいことだが……。

昔（もう10年近く前か）大学行つた頃は、おれもハマつてた。ちようど、CR機というのが出てきた時期だ。たまゝに大勝ちする日もあるが、トータルでは大損している。

極めるつもりがないおれにとっては、豪勢な暇潰しになっていた。

あの頃は……人生は暇潰しだと、本気で思っていた。

おれの行動範囲内にあるパチンコ屋は、現在はどうか知らないが……美しくなかった。

ヴィジュアル的という意味だけではなく タバコが堪^{たま}らなか

った。

それ以上に金も貯^{たま}まらなかったが……。

「ギャンブルで儲けた金は、ギャンブルに消えていく」 昔、誰かが言ってた。

のを、ついこの間も思い出したような気がするのには気のせいかな？
その点、管理人は立派だ。

増えた軍資金を握って、カジノへ大勝負に出向くわけでもなく、
小さな儲けを有る時払いで返済に充ててくれる。

貯金を引き出せない日も、残念ながらあるわけだが……。

催促はしないが、頑張って儲けてくれるとありがたい。

貸主は今日も出勤日だ。

スロットの師匠である借主と一緒に。

……金じゃなくて、部屋のね。

母親らしき女に「ケンタ！」と叱責^{しっせき}された少年は、一口齧^{かじ}ったフ
ライドチキンを渋々、妹らしき少女の手に渡した。

類は友を呼ぶ という喩えは、適切じゃねえか……。

白い顎鬚^{あごひげ}を蓄^{たくわ}えた老紳士は、いつの間にか衣替えをしていた。

右手首に引つ掛けている杖が、おれのイメージするサンタクロー
スっぽくない。

が……ステッキを振り翳^{かざ}したらプレゼントが現れるという設定だ
と思い込めば、それなりに素敵な物語にはなるか。

昔おれは、映画か何かを観て リチャード・アッテンボローが
サンタのおじさんだと、本気で信じていた。

あの頃はおれも無邪気でええ子やったのに……。

1カ月以上も前だというのに カーネル・サンダースは、冬を
先取りし過ぎだ。

そんなに焦んなよ。

季節が近付けば　取り留めのないようなことでも、過敏に反応することが増えていくかもしれない。

「クリスマスかあ」

「……もう、そんな時期か」

「恋人たちの季節。だね」

クリスマスチャンでもないやつには、無関係な筈のイベントだ。

「あの赤い衣装は、コカコーラ社がイメージ付けたんだぜ」

おれの後ろに座った男が、対面の女に知識をひけらかせた。

おれも知ってる。

確か……今は無き、ワンダフルが何かでやってた。

補足すると、あの人形の老眼鏡には、ちゃんと度が入っている。

だからって、盗んでいくヤツがいるとは思えないが……。

そして　一度も弾まず、カップルの会話は終わった。

相槌すらなく……。

女の前で、おれがこのネタを使うことは……何か、どんどん消極的になっていくような気がする。

……いや、今年こそは独りじゃないクリスマスイブを　。

「O」

「おんなじだ。じゃあ、星座は？」

「射手」

「すごい！　運命かも」

「うちの親父も、射手座のO型だぞ」

「なにどし？」

「子^ね」

「トラでしょ？」

「ああ……おれはね^え」

似非サンタよ、贅^{ぜいたく}沢は言わない。

「もしかして、誕生日もいっしょだったたりして。ねえねえ、せえー
の言おっ」

紗唯に……平均寿命という【平凡】なプレゼントを　。

せえーの！

11月15日 考えてみれば、六十億以上の人間が地球上に生きてるんだから、別に驚くようなことじゃないが……おれと同じ誕生日の人間もいるということを、初めて知った。

ミルキーウェイ

ミルキーウェイ

イマドキ珍しく……いや、時代を言い訳にするのは良くないな。家族を大事にする【いい子】だってことは、初日からわかっていた。

おれに人を見る目があるとは思えないが……【いい娘】を演じているように見えなかった。

できる限り親元にいたいと思うのは 母親が死んでから、男手ひとつで育ててくれた父親に対する恩返しの意味があるのかもしれない。

男と女のエゴで生まれた子供を育てるのは、当然の親の義務だと考えているおれには、そういう感覚で両親を見ることはできない。利益性を失って尚、老後の面倒を看てもらおうなんて、厚かましにも程がある。少子化に歯止めがかからないことが不変の事実であるならば、高齢化を解決する術を見出さなければならぬ。でなければ、現行の年金制度はいずれパンクする。金は、生産性豊かなところに流れなければ決して増えることはない。将来的に還付されるという考え方ではなく、現在を運営するために納付しているのだと認識を変えなければ 多くの可能性を有する若い世代の暴動が起きるのも時間の問題だ。老人ビジネスで雇用を確保できる？ 姨捨山計画を発動して老人介護システムをスリム化したほうが、公の財源的にも個の自己実現のためにも、ずっと有益な筈だ。

……紗唯には言えねえな、こんなこと。

娘を持つ親の気持ちを知りたかった。

……もとい。

住人を、我が子のように見守っている管理人の見解を。

「毎日一緒だと、疲れちゃうんじゃないかな？ きつと、張り切りすぎちゃって……9回までもたない。延長になるかもしれないしね。きつと衰えていく過程を見せたくないんだよ……本気で愛してる男性には」

おれが誰かに恋の相談をすることは　これが初めてだ。

末松忠が店舗の様子を見に来る　その時にだけ、おれと紗唯は逢える。

この地上に川は幾つかあるけど、道路特定財源とか呼ばれる公共事業費を食い潰して……ダムもあれば、橋も架かっている。

逢おうと思えばいつでもゼロにできる距離だから、けんぎゅう牽牛とたなばた棚機津女つめのようなロマンチックな物語にはならない。

河川が氾濫して橋が崩壊したとしても、飛行機やヘリコプターがある時代だし。

一度も乗ったことはねえけど……。

潜水艦が沈むのは理解できるけど、あんな鉄の塊が空を飛ぶ原理は信じられない。

早くこっちに引つ越して来ればいいのに、と思う。

おれには仕事があるから動けない。

男尊女卑か？

いや、働く人を尊び無職の人を……とにかく、愛するふたりなら少しでも　1分1秒でも多くの時間を共有したいと思うのが、自然な流れだ。

……昔のおれなら【思うだけ】に留まっていたかもしれない。

「遠距離恋愛って、ホントっばい」

紗唯は、そう言う。

離れていても心を通じ合えることが真実の愛だと。

それは絶対に、壊れない運命なのだろう。

根拠なんかなくても、これが運命だと思い込むことができれば、簡単に信じることができる。

「おにいちゃんと紗唯は、きっとだいじょおぶだよ」

おれも、そう思う。

壊れるほどの長い時間を、許されていないわけだから……。

「でも」

肉体が単なる媒体で、精神が命の本質であるとするならば、体がどんなに離れてたって、お互いに心を感じ合える筈だ。

そのためには、声だったり文字だったり意味不明なキゴウだったり 気持ちを伝える媒介を必要とするわけで……やはり、肉体は必須だ。

肉体と精神が融合して、初めて「イノチ」と呼べる生命体が誕生する。

確実に相手の存在を確認できる関係にあるのなら、体温が触れ合える距離にいたいと思うのは必然で……。

大好きな声が聞けないのは、ちょっとだけさみしいなあ

11月21日 1/f（エフ分の1）の揺らぎなどであろう筈
もないが……初めて、声を褒められた。

ディスプレイメント

必要は成長の母（だっけ？）とはよく言ったもので……おれの右親指（もちろん手の）は、かなりいい感じでメールが打てるようになった。

ノストラダムスの4行詩のように解釈任せになる絵文字に関しては、全く以ってちんぷんかんぷんだが……言いたいことを伝える分には、共通語だけでこと足りる。

全てを知ることができないほど広い世界と繋がることで、ケータイは現代人の淋しさを紛らせるツールとしての地位を確立している。しかし……紗唯の【声】を思い出すと、差別化に乏しい同じ顔の文字でやりとりするだけでは癒されない時代も、近い将来やってくるんじゃないかと　少し不安になる。

母で思い出したが　うちの料理担当者は、冷蔵庫の先入れ先出しができない。

母屋（おお、無意識に母が！）には、冷蔵庫が2つある。

キッチンにあるほうは回転が早いほうだが、それでも冷凍庫には前の週に買ったまま放置されているお肉が入っていることが間（ま）意識的にママを）ある。

加工年月日や賞味期限に関係なく、永久に鮮度を保つことができるのと勘違いしているらしい。

『フォーエバーヤング』を観せてやれば、少しは改心するかもしれない。

見付けた時に食卓が空いていたら、おれが調理してスペースを確保する。

どうせ、すぐに補充されるのだろうけど……。

旧応接間に設置してあるほうは容量の6割くらいを【食品らしき物】が入れっぱなしの状態はやいくとせで　早幾年。

ドア側が一番上が卵を入れるスペースで、一番下が1・5リット

ルのペットボトルとかが入る大きさのスペース　その間にある小さなセクションが、御中元で頂いたジュースに未だ占拠されている。おれは、いただけない。

果汁100%だから。

濃いのは苦手。

恋と同じくらい……。

いい加減、賞味期限が90'sの物体は廃棄してほしい。

が……おれは家に食費を入れていないから、発言権がないので黙っている。

血液型性格判断でO型は大雑把おおざっぱだと言われるらしいが、おれはその抽象に属してはいない。

まあ、掃除とかは結構ルーズだけど。

A型のおかんにムカツくのは、食品だからかもしれない。

切れたやつを食ってるのは、実際おれだけだし。

期限があるというのが、神経質になる要因だろう。

古い物が残って、新しい物が先に無くなる　それが、生命とリンクしているような気がする。

死について考える機会があまりなかった頃から、潜在意識の中でその不自然さに憤りを感じていたのだろう。

紗唯が営業所に来た。

ピンで。

「なんか……急に会いたくなっちゃって」

この前会った時の淋しさが、少しばかり影響しているのかもしれない。

今現在　電車の中では、ペースメーカーとかに支障があるといけないから、携帯の電源を切るように促すアナウンスが流れるらしい。

おれは……携帯がおれに普及し始めてから、電車に乗った記憶がない。

それはいいとして……紗唯は、マナーの悪い同世代の連中に腹が立ったと話した。

紗唯自身の体内に、そのマシンは埋め込まれていない。

直接的な機械系統のトラブルは生じないが、少し気分が悪くなつたそうだ。

飛び交う電波に直接的原因があつたわけじゃなく、その発生源に堪らないほどのストレスが溜まつたのだろう。

これはいいことない。

しかし、もし紗唯と出逢つてなかったら……そういう状況が目の前にあつたとしても、たぶん気にも留めなかっただろう。

今だったら「ルールを守れないやつは出て行け！」と怒号を浴びせて、そいつらを世界の車窓から放り出してやりたい気分だ。

まあ……それだけの腕力がないから、おれのセリフは冗談で済む。

「あんま……ムチャすんなよ」

「するよ」

少し疲れた紗唯の顔が、自己治癒能力を発揮して、微笑みに癒されていく。

「だって紗唯は」

その瞬間、おれには責任感……らしきものが芽生えた。

記憶力が悪いから、よくわからないが……たぶん、生まれて初めての感覚だ。

ココでカレーを食った後 定時までまだ時間があつたので、大家平に紗唯を預かつてもらった。

……正確には「これで、隣のコンビニで好きなもの買って。あつ、鍵渡しとかないと。えーと、あれ？ いやあ、最近物忘れが酷くな

ってね。一昨日なんか……あつたあつた。吃驚した。はい。どこか出掛ける時は、その植木の後ろに隠しといて。まあ、何にも盗られる物は無いんだけどね。知らない人が勝手に寝てると困るから。イブみたいな女性なら嬉しいん　もっすいー……今出るところ……あいよっ　そういう訳で、テレビとか冷蔵庫とかレンジとか勝手に使っていていいから。じゃあね」という長ったらしい名称の　換言すれば「新台入れ替えのため無人になった管理人室」を拝借した。営業所に一旦戻ったおれは、外廻りを名目に……路駐の車内で、事務的な作業に勤^{いそ}しんだ。

おにいちゃんのこと、大好きなんだよ

11月25日　いくつか職を転々としてきたが……ノートパソコンを購入して以来、初めて【z i h y o u】と叩いて、漢字に交換した。

A
r
a
b
i
a
n

K
n
i
g
h
t
s

P
u
t

u
p

w
i
t
h

.
.
.

2
章

第一夜

寝が早かった。

デザートのももちごを食ってから、3時間も経っていない。

32インチ液晶ワイドテレビで中山美穂が彷徨^{さまよ}っている最中、レザーソファアの肘掛に凭^{もた}れ掛けて、徐々に　そして遂に、睡魔に屈した。

紗唯は、煌々《こうこう》と灯りが点いていても平気で眠れるタイプらしい。

近年稀にみる長旅の疲れが原因かもしれないが……。

「もう寝たのか？」

「みたいだな」

答えたおれに、家主は「チゲーよ」と言っつて、ガラス張りのローテーブルにコーヒークップを二つ置いた。

「セックスだよ」

この男は、知らない。

紗唯の【期限】も……おれの【枷】も。

寝息を立てている紗唯を横目に、おれはコーヒーを「ブラックかよ」

おれの部屋が汚いのも理由のひとつだが……紗唯を連れて家に帰りたくなかった。

部屋は離れだが、遭う可能性だって否定できない。
説明するのが面倒臭い。

だから、新築報告（お祝いの品を持参しろという暗黙のメッセー
ジがあつたかどうかは定かではない）を受けたのはラッキーだった。
いや……そう思ったのは「何なら泊まってくか？」と言われた時

だ。

大学に入った頃から、年齢的に【金との付き合い】が現実味を帯びてくる。

交際費が嵩むから、新たに友人を増やそうとは思わなかった。

大切なカノジヨならともかく……どうでもいいトモダチに金を費やしたくない。

沖耶麻斗は、そんなおれにできた　今でも交流がある唯一の大学時代の友人だ。

話しかけてきたのは、もちろん向こうからだが……。

おれの背が低いという理由で、いきなり「お笑いで天下を取ろう」と誘われた。

沖耶麻斗にとって天下取りコンビの鉄則は、チビとデカらしい。

言うほど大きくないのだが……それでもおれとの身長差は、20センチ以上ある。

「まことやまと。いーじゃん、いとしいみたいで」

【ま・と】の位置関係が【い・し】と同じであることは否定しないが……兄弟でもない赤の他人同士が、何十年も同じ相方で長続きするとは思えない。

夫婦も含めて……。

松竹を挙げた理由は、未だにわからないし……今となってはどうでもいいことだ。

おれは極度の緊張症で、人前に出るのが苦手だ。

中川家のお兄ちゃんみたいに、パニック症候群に陥るかもしれない。

誘われた当時は、中川家なんて知らなかったけど……。
断って正解だった。

お笑いタレントを夢見ていた若者は、今では立派な建築デザイナーの卵……いや、雛だ。

同世代の人間がマイホームを建てたことにも驚きだが、その家を自分のセンスで手懸けたというのがスゴイ。

コンセプトは、セミダブル・ライフ　って、所帯持つ気あんのか？

将来的には、企業内建築家として地位を確立したいらしい。

なぜ企業内に納まるうとするのか……イマイチ、了見を得ない。

「紋切り型は避け、ビジュアル的に斬新でありながらも且つ実的な設計を目指す」　そういう意味だろうか？

それなら、矛盾がある。

「1度でいいから、耐震性を無視した高層建築物を設計したい」と、本音らしい言葉を漏らしたことがあるから。

今でも時々、口にする。

「来るんならさつさと来てくんねーかな。東南海地震」

……阪神大震災のボランティア活動に参加した人間の言葉とは、到底思えない。

まあ、これは本音じゃないだろう。

じゃなきゃ、この時期に家なんか建てない。

買い出しから帰ってきた沖耶麻斗は、コンビニ袋からクリップを取り出し、蓋を回した。

下から出てきた封の真ん中に「あたっ！」と人差し指を突き、親指を添えて処女膜を剥がした。

キッチンからスプーンとスティックシュガーを持ってきて、おれの前のコーヒーカップに入れた。

かき混ぜた底面で、粒子状の音が鳴り続けた。

すっかり温ぬるくなったホットの中に、白い継粉ままこが浮いた。

「嫁さんが入居する予定は？」

混ざり切らない白色と琥珀色は　さり気に、コーヒーの味がした。

「そんなオンナいたら、泊まってけなんて言わねーよ」

上着を脱がず立ったまま、沖耶麻斗は冷めたブラックをグビツと流し込んだ。

「思い切ったなあ」

相手もいないのに、結納品総額数百万のおれが言えたセリフじゃないが……。

料理はそこそこ上手い。

こまめに掃除もする。

最近では、一度放り込めば乾燥まで自動でやってくれる家庭用洗濯機もある。

少々御値段も弾むが……。

家政婦としての嫁は、沖耶麻斗には必要ない。

亭主関白も流行らなければ、男尊女卑って時代でもない。

逆に、リストラされて行き場を模索する夫より、パートで稼ぐ妻のほうが権力的に上だろう。

そういう家庭は増えている筈だし、暫くは齒止めがかからないかもしれない。

そもそも、キャパシティの違う優勝劣敗社会と共存共栄社会を同一の貨幣価値で機能させようってのが根本的な誤りで……おれが口を出す問題でもないか。

とにかく、夫婦や家族を形成するにあたって重要なファクターは、経済力だけではない。

たぶん……沖耶麻斗にとって【生まれてくる未来】が優秀な種であるかどうかなんて、取るに足らない問題だろう。

「子供がいる家庭への憧れだよ」と言ってから「セックスは、原始的にして究極の子作り方法だからな」

矢鱈とセックスの話を持ち出す。

27歳にして、漸く初恋をしたこと。

その相手が、AVギャルだったこと。

そして……一度もセックスをすることなく、別れたこと。

今の仕事に就き始めてから（と言っても、もう辞めるつもりだが）

リフォームの相談とか依頼とかでちよくちよく会ってるから、この二級建築士は色々知っている。

おれが未だに【桜桃】だってことも含めて……。

「お前はひとりっ子だから、きつと新車じゃなきゃダメなんだな」

慰めなのか何なのかわからない。

勝手に推論を立てて納得してくれるおかげで、余計な詮索をされなくて済むのはいいが……。

「オヤジの貯蓄に留まって死ぬより、刹那主義の女子高生にカネが流れたほうが経済的に潤うはずだから、また援交ブームは来ると確信はしてたけど……まさか、おまえがな」

アメリカと違って、日本は個人の消費潜勢力に不況脱却の活路を見出すことができる。

不況とは、金が廻らなくて経済という生き物が不整脈ちやうを患っているようなものだ。

「そーそー。ルーズソックスが流行り始めた時、来る！ って思わなかった？ ブルーザー、ブローダー、ブーム」

……そんなことは、どうでもいい。

「条例に引っ掛かって、捕まっても安心しろ。評決のときのマッシュマコノヒーばりに、情に訴えて弁明してやるから」

【刹那主義】という単語が、鼓膜の辺りでリフレインしていた。

紗唯のは……イデオロギーでも何でもない。

「中古かもしれないね」

「そんなんじゃないよ」

寝返りを打って寝やすい体勢をとった際にずれたブランケットを、小さく屈折した紗唯の体に掛け直して、おれはトイレを拝借した。

返却することを条件に、無料で……。

色々と 説明が必要だ。

おれ自身のことではなく……紗唯に関して。
具体的なことは、おれにも殆どわからない。

専門的な医学用語を羅列されると、急に【リアル】が押し寄せてくるような気がして……。

ただ　それが、確実に訪れる【現実】であることは否めない。

残念ながら……紗唯の担当医は、その方面では相当の権威らしい。
苗字は藪^{ヤブ}なのに……。

「テラス、出ねーか？」

水回りが集中した廊下を抜けた所で、炭酸が放出する音が聞こえた、

カウンターキッチンを覗くと、500ミリリットル缶の氷結をグラスに注ぐ沖耶麻斗が視界に入った。

学生時代の沖耶麻斗は、一滴も酒が飲めなかった。

それが、友人でいられた理由のひとつでもある。

ワリカンで損をしない相手なら、大抵の誘いには付き合える。

断る理由が真実だと相手に伝われば、関係が気まづくなることもなく　自然消滅は避けられる。

「寒いじゃん」
^{さみ}

久米宏のジョークと勾配屋根から垂れ下がるシャンデリアを落として、薄暗くなったリビングは　真っ白い壁に多数埋め込まれた間接照明から、いろんな色の光の柱が多方向に放たれて、ムーディーな空間を演出した。

光の屈折率やらなんかを計算した上でその場所に配置しているのかもしれないが……センスの悪いおれには、同じ高さで間隔で整頓されていたほうが美しく見える。

色も、柔らかい暖色で統一してあったほうが落ち着く。

キッチンと斜向かいの2階の壁（リビングは吹き抜けになってるので、その床と天井の中間くらい）にある3つの半円筒状のブラケットライトが、上下に開いたガラスセードの隙間から光を漏らしている。

廊下や階段にあるフットライトは、周囲の明るさに応じて勝手に点灯するらしい。

既存のライトが無駄に多過ぎる上に、スタンドライトまである。今は電力を消費していないので、どんな輝き方をするのかはわからない。

常設の球が切れた時の予備くらいにしか、用途が思い浮かばない。にしては、結構な代物っぽい風貌だ。

まあ……タダメシ食わしてもらった上に泊めてもらっというて、ヒトン家の文句は言えない。

「オトコと星を見上げる趣味はねえよ」

おれは、開閉しないレザーソファーに深く腰を沈めた。

「タバコ、吸いてーんだよ」

煙草を覚えたのも……中退してからだ。

律儀に、二十歳を過ぎてから興味を示す人間だつて、この広い世の中には大勢いる筈だ。

おれが知っているのは、たった一人だけ……。

「ここじゃ、まじーだろ？」

左手のウィンググラスが、ブランケットを被ったレザーソファーを指差した。

なぜに、ウィンググラスを使う？

未成年……いや、成人式なんて迎えられない紗唯の寝顔は、横身のために左半分しか見えなかったが　やはり、コドモだった。

「……嫌煙家なんだけどな、おれ」

右手のウィンググラスが、御免被りたいのに……おれを指名した。

なぜに、ウィンググラス。

「……飲めねえよ」

「おれが飲めるんだから、飲める」

学生時代ならともかく……地下にワイナリーを持ってるやつと言葉なんて、信用できない。

「新築祝いの1つも持って来ねーヤツを泊めてやるんだから、少し

は付き合え」

無色透明。

渋々受け取ったグラスは、目視でオレンジを検出することができなかった。

臭いを嗅いでみた。

化学の実験で薬品を扱う時みたいに、手の風圧で。

「おいおい……」

無味無臭っぽい。

「死にやしねーよ」

二日目

波型のポリカーボネイトを通過して、攪拌かくはんされながら東の陽射しが入ってきた。

半開きの眼で電話を見ると　ちょうど、10時10分になった。

「おそよ」

そんなに遅くはない。

毎週、こんなもんだ。

用途は時計とメールくらいで、電話機としては殆ど機能していな

い……こともないか。

おれは腕時計をしたことがない。

今まで2回時計を買ったが、何れも懐中時計だ。

ファッションではない。

金属アレルギーでもない。

革だろうが何だろうが、おしっこした後やうんちした後手を洗う時に邪魔くさいから　理由はそれだけ。

そういう意味で、機能が1つのアイテムに纏まとまっていることは喜ばしい限りだ。

日常生活で使用頻度が極端に少ない機能ばかり増やされても困るが……ポケットに収まる程度の大きさを維持できるなら、別に文句はない。

「もう電話じゃねえじゃん！」ってツツコむだけだ。

自分がお洒落に飾ること自体にあまり興味が無いが、よく使う手周辺のアクセサリーは特に鬱陶しいから身に付けない。

まあ……左手薬指輪の心配は、当分なくていいだろう。

「何時に起きた？」

「7時」

「早っ！」

……おれには、7時起きおきの記憶がない。

4歳くらいから、バスの送迎があるええとこの子が行くような幼稚園に通っていたらしい。

その頃、何時起きだったかも覚えていない。

小中学校は近かったから、7時半に起きれば間に合った。

チャリ通禁止だった。

高校は一番近い県立に通って、8時に起きていた。

チャリ……を3回パクられた。

大学は近所になかったが、車で通えばそこそ近めの所に推薦入学が決まった。

一年の時は必須科目があったので、仕方がなく高校時代と同じ時間に起きた。

その頃は朝メシを食わない生活をしていたから……授業の中盤までには間に合った。

二年以降は1限を外して履修計画を立てることができた。

9時半に起きれば、講義の頭に出欠を取られても平気だった。

コンビニで働いていた時は……今の紗唯と、半日ズレた生活リズムだった。

いくつか職が変わったが 職種以前に、なるべく朝が遅めの仕事を選んだ。

現在は、高校時代の同級生のコネもあって、仕事のある日（もう辞めるつもりだが）は8時45分に携帯のアラームをセットしている。

どうでもいい話だが……排便は、基本的に家ではしない。

リズムが安定していないこともあるが……学生時代は、授業中にトイレに行った。

意識して授業をサボろうっていう悪い生徒じゃなく、休み時間のカンチャンで我慢できないくらい出そうになるから。

生理的なことは、しなくなったらするのが一番だ。

森本家のトイレットペパーの節約にもなるし……。

ウン筋を確かめる派なので、結構な量を使う。

オイルショックの時期に生まれていたら、とんでもない事態になっただろう。

まあ、それなりに環境適応能力がある生き物だという自負はあるが……一度きりの人生に仮説を立てても仕方がない。

おれはこうしてこの時代に生きていて、紗唯は。

何時に寝たかわからないが……目覚めは頗る、悪い。

変な頭痛がする。これが、初めて経験する宿酔なるものかもしれない。

5%のアルコール分で……いや、その後オレンジ色のフルーツワインを1本空けて、少し饒舌になったような気はするが、話した内容を細かくは覚えていない。

が……何故か鮮明に、ひとつの会話を覚えている。

「最初に会った時から思ってたんだよ。お前は平凡に嫌われるタイプだっけ」

「……どうしろってんだよ」

「もぐら叩きでパーフェクトやったことあるか？」

「はあ？」

「もぐら叩きだよ、ゲーセンの」

「……やったことねえよ」

「何点出した？ 最高」

「だから、やったことねえって。もぐら叩き自体」

「まずムリ。出る杭は打たれるって言うけど、打たれずに生き残る幸運な杭だつてあるはずさ。そういうタイプだよ、お前は」

「欲がないのは、ヨクナイか」

思っただけか、言っちゃったのか定かではないが……27年と12カ月弱の後悔が、そのクダラナイダジャレに集約されている。

「あいつは？」

「仕事だつて。はい」

「……何だ？」

鍵だ。

「これはイスですか？」「いいえ、リンゴです」

アホな英文の和訳をするまでもなく……どう見ても、Keyだ。

「締めてけってか。どこ置いとくんだよ」

「合鍵だつて」

男友達に、アイカギで……。

「ホントに相手がいねえんだな。随分早い先行投資だ」

……相手もいないのに、結納品総額数百万のおれが言えたセリフじゃない。

のに、またまたノートパソコンに向かって呟いてしまった。

ココア1杯の値段で、バタートースト、野菜サラダ、ゆで卵が付いてくる状況に、紗唯は驚いていた。

初モーニングだったらしい。

「バイキングんともあるし」

「食べられないよね、朝からそんなに」

「食うやつは食う。それに、みんながみんな朝起きるとは限らねえだろ？ おれは昼だろうが夜だろうが、食い放題で得するほど食べねえけど」

週刊少年サンデーに左手の人差し指を挟んだ少女の口から発せられる原価率とか薄利多売とかいう言葉に……週刊プレイボーイを読んでいたおれは、クリビツテンギョウした。

この業界用語が思い浮かんだことにも、我ながら驚いた。

紗唯にシュガーポットの粉砂糖をスプーン並盛り2杯淹^いれてもらったホットが少し冷めた頃合を見計らって、吉岡美穂のグラビアを閉じた。

今まで深く考えなかったけど……「ホット」って頼むと、必ずホットコーヒーが出てくる。

「アイス」って頼んでも、やっぱりアイスコーヒーを注文したことになる。

頭にホットやアイスの付くメニューは他にもあるのに、どこに入っても暗黙の了解が成立している。

コーヒー専門店じゃなく、普通の喫茶店なのに。

この略式の標準化は、地球規模で通用するんだろうか？

【モノではないサービス】は、大衆にとって曖昧あいまいで 激戦区でこの程度の量だったら、きつと客は離れていくだろう。

まだまだ、コストパフォーマンスを優先させる人は多い筈だ。

デフレは、モノの価値と共に 自己実現欲求という【ヒトの価値】も下げてしまうのだろうか？

休みなので、学校に行った。

学校が休みなのではなく、おれが定休日だから……。

中高一貫というシステムをニユースで耳にしたことはあったが、見るのはこれが初めてだ。

新しくて綺麗なことを除いて、外見的には至って普通の校舎だが

……パツと見じゃ、よくわからん。

学校側は、紗唯の【おかされた状況】を把握している。

その点を考慮しているとは言え……部外者に対して、何てガードが甘いのかとも思ったが……授業料を納期までにちゃんと払ってくれる顧客に、悪い印象を与えたくはないのだろう。

共学だから、変な目で見られることもなかったし……女子生徒たちのアイドルにもならなかった。

たとえオトコに飢えていたとしても、おれのミテクレじゃあな。

……？

BoAとゴマキとあややと市川由衣が同じクラスにいてもおかしくないんじゃない。

そういうクラスになったら、学園生活をもっとエンジョイできたのに。

もちろん、おれに枷がなければの話で エ、エンジョイて……。常連だった所為か、紗唯と保健室のオバサンは仲が良い。

含むところがあるのかないのか…… ホットミルクで御持て成ししてくれた。

伸び盛りはとくに過ぎたから、もう手遅れだ。

カルシウム不足は、ちったあ解消されるかもしれない。

オモテなしだけに、ウラだらけです。

「寒くなるから気を付けなさい」

心理学も専攻してんのか？ この先公。

「身長おんなじ。また1コ、共通点だね」

オトコとしては喜ばしくないが……この笑顔は、悪い気がしない。

「体重は違うね」

「シヨックだろ、同じだったら」

「座高」

「シヨックだよ！」

聴診器を首にぶら下げている長身の白衣は、少し声を出して微笑んだ。

左手の薬指にリングがあったから……だからって、子供がいるとは限らないけど……えーい、ままよ！

「母はハハハと笑った」

思っただけなら、誰にも文句は言われない……。

街を歩いた。

ジュビロの完全優勝から1週間が経ち、優勝パレードから3日経った磐田市は 平静を取り戻していた。
と言っても、来たのは初めてだが……。

1stステージと2ndステージの覇者が同じだったために行われなかったチャンピオンシップ　その経済的損失は5億円に上るとも言われ……そんなことは、やってる選手には関係ないか。

派手じゃなく、喧騒けんそうもなく　紗唯にとって、優しい街だと……そんな気がした。

つなや
鰻を食った。

井ではなく、重。

下から、米鰻米鰻山椒。

おれはグルメじゃないが、土用の丑の日に家で食う、電子レンジでチンしたヤツとの違いは明らかにわかった。

味皇のようなリアクションはできないが、かなり美味かった。

注文前に出された茶の時点で、既に一味違っていた。

名古屋名物に、ひつまぶしというものがある。

最初はそのまま、次に薬味を乗せ、最後は出汁　だし　をかけてお茶漬け風。

3つの食感を味わえるのがウリだが……最初から最後まで、1番美味しい食いで食ったほうがお得じゃないだろうか？

それを言い訳にしているワケじゃないけど、おれは愛知に居ながら1回も食ったことがない。

中日ドラゴンズのレストランでもない。

古風な大衆居酒屋っぽい感じで、カウンター席が5つに、4人掛けのテーブルと、おれと紗唯が座った2人掛けのテーブルが1つずつあるだけの、割りと小さい店構えだった。

かわや
厠に行く通路から覗いた障子の奥に広がる畳が敷かれた部屋には机も座布団もなかったが、それなりの人数を収容できるだろう。

2世帯家族なら、どうにか……。

儲かってるのかどうかわからないが、それなりの金を取れる商品

であることは間違いない。

独りだったら、こんな値が張る店には絶対来ない。

自分ではそういうつもりはないが……虚栄心かもしれない。

いざという時のために、平素の節約を課している。

だから、根本的には儉約家ではなく、欲があるのは良いことだ。

おれたちが席を立つちよつと前に中年のカップルが入って来て、入口側のカウンターに座り、主人とダイエーの話で盛り上がり始めた。

……あ、スーパーの経営統合とかじゃなく球界のほうね。

9回やる。

……風邪にご用心。

病院に行った。

おれの頭を良くする目的じゃなく……。

アルジャーノンの菅野美穂は好き。

言うのは只だ^{ただ}。

何かの間違いで、向こうがコクってきたとしても……やっぱり金
はかからない。

絶対に、付き合うことにはならないから。

たとえ、梅酒を控えてくれたとしても……。

どうでもいい話だが……吉沢悠とバヴィエルⅡサヴィオラが似て
と思うのはおれだけか？ 2006年ドイツで開催されるワールド
カップサッカーを御覧戴ければ、賛同者は増えるだろう。

でっかい大学病院だから……たぶん、死人も沢山出るんだろう。

死んだ人間の大半は、病院で死んでるから。

ロビーの大画面では時代劇が放映されていた。

老人たちがテレビに近い長椅子に寄り集まって、殺陣^{たて}のシーンを
客観的に眺めていた。

大きな便りを済ませたおれは、その横を通って一番後ろの長椅子の隅に腰掛けた。

短い足を組んだ（意識しなければ、大体左腿が上になっている）ところで、中学校時代の同級生に声を掛けられた。

「おお、ご無沙汰」

とは言ったものの……正直、おれはあんまり覚えていない。

左の腰骨の辺りに付けてある名札を指差してもらって、漸く「そう言やあ、いたなあ」と思う程度の記憶しかない。

名前の右に添付してある写りの悪い顔写真を見ても、やっぱりわからない。

本人がどうかすら……。

向こうから声を掛けられなければ、一生気付かなかっただろう。おれの顔を見て、よくおれだとわかるもんだ。

……成長してないってことか？

「どお？ 白衣の天使」

白井典子は自慢げに言って、くるっと回って見せた。

……ええトシこいで、よくやる。

「悪意のペテン師にしか見えねえけどな」

ツベルクリン注射の痕が残っている辺りを、おもいきり平手で殴られた。

「ごめん。仕事だから」

白いぺったんこの履物は、車椅子の男性に向かって小走りで行っていった。

……暴力を謝れよ。

紗唯の定期健診は、特に問題なかった。

いや、病を患っていること自体問題なのだが……今すぐどうこうということはない。

らしい。

おれには どうすることもできない。

道草を食った。

食事の意ではない。

アミューズメント施設（まあ、普通にどこにでもあるゲーセンだけど）があったので……紗唯の制服姿が気にはなったが、寄った。正式名称は知らないが、UFOキャッチャーみたいなやつをやった。

三度目の正直で、これまた知らないキャラクターをゲットした。紗唯のハートもゲットした。

これは、今に始まったことじゃないか。

……イマドキ、ゲットで。

ダンディ坂野 あれは、ゲッツか。

シオルダーバッグには入らない大きさだったので、紗唯は4本足のぬいぐるみを抱っこして持ち歩いた。

荷物が嵩張る^{かさば} 改めて、マイカー社会の便利さを知った。ガードマンっぽい制服の人はいたが、何も言われなかった。

……口ではね。

学校に戻った。

相変わらず、ノーガードだ。

ここには、盗んだバイクで走り出したり、夜の校舎窓ガラス壊してまわるような生徒はいないらしい。

尾崎豊が逝ったのは、おれが高校生の時だと思う。リアルタイムでは、そんなに印象が残っていない。

音楽に興味がなかったわけじゃないが……男性ヴォーカリストの
プライベートな部分に関心がなかったのは事実だ。

後々知るってことは、よくある。

没後の特集で高騰する価値を見て、改めて彼がアーティストだったのだとわかった。

早世に正しいもクソもないけど……あれはあれで、良かったんじゃないだろうか。

社会人に染まって尚、社会批判し続けるのは不可能だし 五十過ぎてから反抗期を振り返って、若過ぎた不良を自分自身が肯定できるのか？ という疑問もある。

一番苦しいのは、自分が否定したいと思い始めた過去が、多くの人の賛同を得ていることだ。

あの頃も今もそしてこれからも 必ず通過するハイティーンという世代は、異端を称賛してしまうだろう。

「あれは若気の至りだった」と主張する道が通行止めになったまま
後戻りも許されない。

ファンを裏切りたくない。

カリスマを失いたくない。

ずっと、愛されていたい。

おれが地位と名声を轟かせたら、間違いなくそう思う。

印税生活を確約されたようなものだから、ペシミストとして歌い続けることよりも隠者になることを選ぶ。

世間が自分に求めるものを提供できなくなる不安、大人に成長する術を鎖された恐怖 ティンカーベルが脳裏に鬱陶しく纏わり付くストレスは、少なからずあったはずだ。

みんなそういう感情を中に秘めてはいるが……叫ばない。

公言さえしなければ、後々自己完結で收拾がつくから。

そういった狡猾さの欠乏が、致命傷になったのだと思う。

永遠の純粹さを売りにするつもりなら、反社会的思想を換気させる最低限の情報のみを与え、直接的な接触を完全回避するために

アパルトヘイトを強制執行するべきだ。

隔離する形での保護は、映画の中でFBIとかがよく使っている。おれの『SEVENTEEN'S MAP』は、幼い頃に幾度となく創造していた敷き布団の海図にちよこつと毛が生えた程度の……おつむが全然成長していないネバーランドだった。

労賃を得るような年齢になり、買ってまでの苦悩はしたくないおれは……たぶん、安楽死できるタイプの人間だろう。

ただ 自分が生きている間は、愛する人にも生きていてほしい。最近何だか、どんどん欲張りになっていく気がする……。

ホームルーム（中学までは終わりの会とか言ってたのに、高校になるとちよつと気品のある横文字に変わった。のは、おれの田舎だからか？）が終わって、生徒たちが校庭に流れ始めたところだった。

4 Dの教室に入ると、女子生徒が4人寄ってきた。

当然のことだが……おれにじゃなく、紗唯に。

1人を除いて、みんな小学校時代からの幼馴染みだそうだ。

みんな……おれよりも背が高い。

唯一勝っているのは、ウエストくらいだろう。

1人を除いて……。

4人の中で……と言うか、クラスの女子で一番背が高そうなお「ふーたん」は、練習試合があるからと言って、挨拶程度で教室を後にした。

長身を活かして、バレエとかバスケとかやってるのかと思いきや、フエンシング部のホープだそうだ。

確かに、リーチは長いに越したことはない。

打ってる連中からしてみれば、儲かりさえすればそんなもんでもいいというのが本音だろうけど……あ、パチの話ね。

帰宅部なのに色が黒い「エリー」は、本名と合致する文字が見当たらず……ニッケームの由来がわからない。

想像するに、みんなと一緒に行ったカラオケで当時付き合っていた彼氏が彼女に向かって桑田圭祐の真似をしたからとか だとし

たら、危なかった。

一歩間違えば、彼女はみんなから「ギャランドウ」と呼ばれる羽目になっていたかもしれない。

父親の仕事の関係で、残暑の厳しい二学期の頭に転校してきた「まいちゃん」は、昨日オープンしたナンタラゆうカフェ（名前が思い出せない）に行きたいと言った。

街の情勢に敏感で、今ではジモティーズよりも地元に詳しい。

苦小牧育ちの道産子は未だ暑さには馴染めないらしいが、新しい街にはすんなり融け込んだ。

若さが直接的な理由になるのかどうかわからないが……環境適応能力が無いに等しいおっさんには、羨ましい限りだ。

「郷に入っては郷に従え」という格言を实践できるほど、おれは器用じゃない。

将来役立つかも 勉強する理由なんて曖昧で、意欲なんてそうそう沸き立つもんじゃない。

況して、将来が残りわずかしかない人間なら尚更だ。
それなのに紗唯は、成績優秀らしい。

毎日授業に出ているわけじゃないのに……教師の、教師としてのレベルが低いわけでもないだろうし……何故か紗唯は いや……本質的な部分での賢さを有しているから、少ない時間に得た知識でもすぐに吸収できる理解力に長けるのかもしれない。

BW H&U エイトに長ける「ゆっぽん」が、数学の教科書を学生鞆から出して広げ、おれの記憶から削除された単語を幾つか並べ

4 連休中の紗唯に解答を求めた。

日直らしき男子生徒が、敷き詰められた歴史的仮名遣いを雑に拭いた後、黒板消しクリーナーの音が教室に籠った。

当たり前だが……黒板消しで消えるのはチョークの粉で、黒板自体は消せない。

って言うか、どっちかって言うと、緑だよね。

黒板の横には、色々な掲示物が貼ってある。

その上のほうに、今月の目標が掲げてある。

定型句として印刷されたその太い文字は見えるが……肝心の目標は、細いマジックで書かれていて読めなかった。

視力が悪いからしょうがない。

4500円＋消費税で購入した眼鏡は、レヴィンの使っていない灰皿に入れてある。

運転する時以外、あまり掛けない。

ここでは目が悪くたって、命の危険はない。

可愛いコの顔は見えないが、ブサイクも見なくて済む。

比率で言ったら、圧倒的に後者のほうが多い。

後ろのほうの見えない掲示板に目を細めていると、やっと紹介されるような話の流れになっていた。

まあ、なきゃないで別に構わねえけど……。

「どうして？」というリアクションはなかったので、ちょっと安心した。

紗唯がおれを選んだことに対しても……おれが紗唯を選んだことに対しても。

……どうしてだろう？

同世代のおしゃべりには気まずい空気もなく　その普通過ぎる

光景は、おれにとつてすごく違和感があった。

……おれは紗唯に【いろんなこと】を考えさせてやしないだろうか？

トイレに入った。

立って放てるほうだから、レディースじゃない。

だからって……でも、背に腹は代えられない状況の時は、迷わず腹の調子を考慮して行動する。

因みに、高校時代に一度だけ職員用トイレに入ったことがある。

掃除の割り当てになってるんだから、生徒にだって当然そのくらの権利がある筈だ。

他に利用客がいたら、おれはひとつ離れた便器に立つ。

これは便に限ったことではなく、基本的に混み合ったところが嫌いなだけだ。

イチモツを覗かれるとか、そういうことを避けているわけじゃない。

逆に、見られればどんどん綺麗になるかもしれないし……。

急いでない時は、大体真ん中に立つ。

入口に一番近い場所は、かなりヤバイ状態の人のために空けておくのがマナーだと、おれは思う。

そうすることで、窮地に立たされた時に救われる権利がおれにはある筈だと考えることにしている。

トイレに限らず……まあ、いいか。

4 Aの隣（校舎の端っこ）にある男子トイレは、小用の便器が4つあり、先客もいなかったので、少し迷ったが、入口から2番目に陣取った。

ベルトを外さずに、スラックスのチャックを下げた。

トランクスの社会の窓から、陰茎を引き出した。

「カレシですか？」の言葉が、左耳から入り、微風が項（うなじ）を通過して、すぐ右の便器が塞（ふさ）がった。

ついさっき、ブラックボードを緑に戻した男子生徒だ。

「僕は彼女が好きなんです。でも、どう接したらいいのか分からない。告白どころか……まともに目を見て話すことすらできない」

普通の学生もいて、ちょっと安心した。

「うわっ！」

おしっこが排出口で分裂して、左大腿部のチェック柄に飛散したらしい。

……普通の男性として、ちょっと安心した。

卓球をやった。

おれは中学時代に卓球部でそこその戦績を残したので、そこそこ自信はあった。

が……昔取った杵柄きねづかは、ちょっとばかり古過ぎた。

いや、ショット自体は良かったんだ。

ペンで思いつきドライブをかけたピン球はクロスに速くて低い弾道を描き、県大会出場者のフォアを見事にパッシングした。

卓上のクエルテンと呼んでほしいくらい、それはそれは素晴らしきショットだった。

二度とできない最高のショットだった。

ただ……肩の付け根と肘の付け根が一瞬飛んで行ったような気がした。

すぐ戻ってきたようだから大事には至らなかったが……小娘相手に大人気なく本気を出した罰だ。

まあ　その後は、最近めつきり運動しなくなった三十路間近のおっさん相手に、女卓ジョウタクのエースが大人気なく本気を出した（に違いない）から、罪の意識は遠退いたけど……。

疲れるし……腕がもげたり踏み込む足が骨折したりするといけなので、念のためにスマツシュ系統は封印した。

が、結局メチャメチャ疲れた。

カットマン相手に、ツツツキでツキ合うもんじゃない。

筋肉痛が襲ってくるかもしれない。

…… 3日後辺りに。

来客用駐車場に行った。

2枚しか昇降ドアはないけど、レヴィンは車検証上では一応5人

乗れる設計になっている。

そこに女が座ったのは　これが初めてだ。

おれと紗唯の私物をトランクに詰めて、黒川麻衣と酒井彩音が助手席側のドアから後部座席に乗った。

因みに、おれは常時トランクに毛布を入れてある。

いつ何があってもいいように。

そう言やあ……全然洗ってねえな。

まあ、いいか。全然使ってねえから。

藤田奈々子と……高倉優子だったら、さぞかし窮屈に感じたことだろう。

今日が小村父の誕生日で　その娘が、そういった家内の行事に参加する、名前のとおり優しい性格だったことは　幸いだった。いや、おれのにじゃなくて……レヴィンのにね。

静岡県バージョンにFMチャネルのオートリサーチをかけたら、聞いたことがある曲が流れてきた。

誰だっけか……あつ、思い出した。

唐沢美帆だ。

漢字がこれで合ってるかどうかは、わかんねえけど。

女だけの「何が食べたい会議」が終わるまで、そこら辺をぐるぐる走り廻って　空^すいていた、ココスの駐車場に入った。

お腹のほうは、そんなでもない。

5時半というのは、おれにとつてかなり早い夕食だ。

と言つても、食事がテーブルに到着したのは6時半だが　いや、店の対応がどうこうじゃなくて……選^えんでる時間も、楽しい食事のうちってか？

昼に米を食ったので、おれは麺類を注文した。

肉にしようか迷ったが、カルボナーラという重そうな響きは、満腹感を味わえそうな気がした。

元を取れないと思つたが……^{タイムン}対面の2人に流されて、ドリンクバ
ーもセットで頼んだ。

スーツ姿のリーマン1人と、制服姿の女子高生3人　おれが端

から見たら、豪勢なエンコーだと思うに違いない。
店内のメニューの中ではそこそこの単価の高い料理が、おれたちの
テーブルに並んでることだし……。

他人の奢りだからって、こいつら……まあ、月給が一番高いのは
おれ（だよな？）だから、しょうがない。

宝石のローンとか、結構厳しいんだけどなあ……。

家に着いた。

おれん家じゃなく、末松家に。

途中、2軒寄る家はあつたが……。

来ることは伝えてある。

……おれからじゃなく、紗唯から。

ちゃんと連絡をしてくれる娘だから、親としては安心だろう。

おれは……必要に迫られない限り親とは関わりたくないから、外
出する時とか帰らない日とかでも、こっちからは何も連絡をしない。
「どこ行つとつたの？」「何食べた？」

臍^{へそ}の緒が疾^とうに切れてる子供を、　未だに管理下に置きたが
る。

ガキじゃねえんだから、放^ほつとけよ！

サイドミラーを閉じて、家のすぐ前にレヴィンを路駐した。

ガレージには相変わらず　カラーが収まっていた。

長く乗れる車ではあるんだろうが……本当に長い付き合いだと思
う。

おれも、暫くレヴィンを手放すつもりはないが　いつ心変わり
するかわからない。

玄関の前で、犬が御座りをしていた。

首輪をしていたが……たぶん紗唯ん家の飼いだではないだろうか

ら、近所の誰かんとこの【放し飼い犬】だろう。

それか……盛りの時期で、遠くからやって来たか。

おれは小学校4年くらいの頃から中学何年かまで、犬を飼っていた。

神社の簡易ダンボールハウスで泣いていた（おれにはそう聴こえた）捨て犬を拾ってきて。

「おれは」と言うより「おかんが」と言ったほうが、正確だが……。「ワンワン」はある日、鎖を断ち切つて忽然と姿を消した。

連日の味噌汁ぶっかけごはんに嫌気が差しての行動だと思つていたが……忘れそうになった頃、ちやつかり帰つて来た。

雨露を滴らせながら、窓ガラスに前足を寄り掛けて座敷を覗いているのを、お経を読み終わつたおばあが見付けた。

それから何日だったか何ヶ月経つたか覚えていないが　12匹、産んだ。

3匹は瞼の開かない間に死んで、5匹は方々《ほうぼう》に……？数が合わんな。

とにかく、森本家には2匹が残った。

「クロ」は近所から五月蠅いと苦情が出て、おれがある日学校から帰つた時には　既に、保健所に引き取られていた。

仔犬の頃大人しかつた「シロ」は、いつしか……おれを見る度によく吠えるようになっていった。

彼はオスだったので、それ以降、繁殖することはなかった。

犬に限らず……おれは【命を育む】ということに不向きな人間だと悟つた。

赤い首輪は御座りを解除し、鼻をひくひくさせると、しつぱを振りながらおれたちの間を通り抜け、どこかへ掃けて行った。

紗唯は玄関のドアノブを引いた。

が、開かなかった。

「ちよつと持つてて」

紗唯はおれに騎士のぬいぐるみを預け、手に持つていたシヨルダ

ーバッグからキーホルダーを取り出した。

おれん家には、鍵を持ち歩くという習性がない。

1個しかないので、全員外出する時は最後に母家を出た人が物置近くの鍵置き場に掛ける。

スペアを作ってもいいが、別に盗られて困るようなものもねえし。治安いいし。

おれの部屋には、鍵がない。

昔はあったと思うが、紛失した。

これまた鍵のないタンスの中には、総額ン百万の宝石があるから、勝手に持って行かれると将来おれの嫁さんになる女は困るかもしれないけど……って言うか、結婚できるかっていうことのほうが深刻な問題のような気もしなくはないが……まあ、大丈夫っしょ。

治安いいし。

居間に通された。

末松忠や……他の誰かがいる気配はなかった。

鍵が掛かってたんだから、当たり前か。

「たぶん、清水のおいちゃんとか」

おいちゃんと言っても、兄弟姉妹から生まれた男の子じゃない。って言うか、一人っ子だし。

血縁関係のある甥ではなく、小さい頃から「おいちゃん」と呼んでいる名残なごりだそうだ。

感覚的には、ミシエルが「ジェシーおいたん」って言うようなもんか。

あれは従兄弟いとこって設定だったかな？

記憶が曖昧。

ただ、教育テレビで一番面白い公開録画バラエティ番組だったことは覚えている。

また再放送しねえかなあ、フルハウス。

シオルダーバッグと人馬のぬいぐるみをソファアに置いて、制服姿の紗唯はサンリオの暖簾のれんをくぐった。

コタツ机の上には、パチスロの雑誌の下に 若者向けの女性誌があった。

やっぱり、普通的女子高生だ。

……四十路男の趣味かもしれないか。

「粗茶でござりまする」

茶ではなく、コーヒーを持て成された。

ブラックじゃないやつで、ほっとした。

アイスじゃないやつでホット……。

思い出したように台所に戻って、紗唯は一口チョコレートの大袋を取って来た。

それぞれにアルファベットが1文字ずつ記された……ブラックのやつ。

8時半になった。

荷物を部屋に片付けて、紗唯はお風呂に入った。

その十数分後 おれがノンノを読んでいる時に、末松忠が帰って来た。

「帰けって来たかア？ 家出少女」

……清水のおいちゃんを引き連れて。

「悪かったね。突然押しかけちゃった上にわざわざ送ってもらっちゃって」

末松忠は襖ふすまを開けて、座敷から座布団を用意した。

「やるなア、不良青年」

主人がわざわざ上座に座布団を用意してくれたのに、それを移動させて、おれのすぐ右隣に座った声は……かなり臭かった。

「おいちゃんな、おいちゃん知つとるやろ？ 初めてか？ おらア、二ーちゃん知らんぞ。何や、あんな。おいちゃん、カツオ言つんや。勝って生きるって書く、常勝やな。二ーちゃんはあれか……何や？」
……生きちゃあいるが、酒には負けっぱなしだ。

「また、昼間っから飲んでたの？」

トレーナーに着替えた風呂あがりの紗唯が、バスタオルで長い髪を拭きながら廊下を通り過ぎた。

「ほらっ、すぐまたあんなこと言う。昼間っからっちゅーけどよオ、何を以って昼間かつちゅーことだよ。なア、二ーちゃん。夜働いとるモンは、仕事が終わったら夜やろ？ あっ、朝か。で、すぐ夜や。やっ、昼やな。ほんで呑んだるんや。もうみんな言う。仕事終わってな、おいちゃん呑みよるからな、みんな言う。昼間っから昼間っから、夜間っからは朝間っからやぞ。おいちゃんおかしいな？ おかしいやろ？」

適当に相槌を打っておいた。

酔っ払いの話し手は、聞き手の引き攣れる笑顔に気付くことはなかっただろう。

突如として鬱状態に陥るものの……全般的に、気分良さそうに喋ってたから。

10時になった。

二階にある自分の部屋から、髪を乾かした紗唯がバスタオルを持って降りて来た。

末松忠は、風呂に入っている最中だった。

タイミングよく……のんべえは、トイレを拝借している最中だった。

脱衣所の洗濯籠にバスタオルを入れて居間に入って来た紗唯は、おれの左前の座布団にちょこんと座った。

「お疲れさまでした」

ドライバーに労いの言葉をかけて、一礼した。

以前にテレビで見たボクシングの、試合直後の勝利者インタビューで、タイかどこかの選手に日本のアナウンサーが「お疲れ様でした」と言ったら、通訳の外人がその【質問】を素直に訳して、ムツとして答えたチャンピオンのセリフを「いいえ、私は全く疲れてはいません」と直訳したのを、ふっと思い出した。

「どういたしまして」

礼には礼を。

「そっちは大丈夫？」

ワンツーリターンみたいな会話。

「ちよつと疲れた」

微笑が、肩で息をした。

「いつも何時くらいに寝る？」

「うゝん…… 11時とか、かな。おにいちゃんは？」

「おれは…… 不規則」

眠くなったら寝る。

大体1時から4時の間で。

それと、寒い時も早く寝る。

もうすぐ寒くなるから、毛布に包まる時間は早くなるだろう。

「疲れてんなら早めに寝たほうがいいぞ。変なのに掴まると厄介だし」

……結構長えな。

寝てんじゃねえか？

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

コタツ机に両手を突いて、紗唯は立ち上がった。

「何のお構いもできませんで」

「いいえ」

ホステスはゲストに、深々とお辞儀をした。

「おやすみなさい」

廊下を摺って　小さな足音が、階段の上にフェードアウトしていった。

適当に、左手でチョコを掴んだ。
4個取れた。

アルファベットをよく見ると　RとKを避けて、別の文字を探した。

Sだけがなかなか見付からずに　携帯が鳴った。

液晶画面に表示されたのは……親父の名前だった。

「もしもし？　……いらん。うん、そのうち帰る。ううーい」

予想通り、おかんからだった。

「おはよう、ジェントルマン」

電子音は、どうやらトイレにまで聞こえてしまったらしい……。

第三日

日付が変わった。

「悪かったね、迷惑かけちゃって」

漸く 解放された。

完全な静寂とはいかないけど……^{いひき} 鼾や寝言には、合いの手を入れてなくて済む。

末松忠はコタツを捲^{めく}ってモルツの缶を拾い、ビニール袋に入れて、持つところを蝶々結びで結んだ。

パンパンになった小さいビニール袋の中で数個のアルミが擦^{こす}れる音がした。

清水勝生の頭の後ろ ソファアの陰に、そのゴミは静かに置かれた。

「どうして……まだ引つ越さないんですか？」

店舗の改装にはもう少し時間がかかりそうだが、オーバーエイジ枠を設けて特別契約した居住区のほうにはいつでも入居が可能だ。

それなのに、末松忠の入居予定日は来年の2月初頭になっているにしても……昔のおれは、こんなストレートに訊けるような性格じゃなかった。

「十三回忌が済んでから、って思ってたね」

襖が開いて、仏壇が現れた。

座布団に腰掛けた鈴^{りん}の横に立て掛けてある小さな遺影に歩み寄って、末松忠は正座をした。

「成人の日に……今年は違うけどね」

その背中では 淋しそうに小さく丸まっていた。

「振袖姿を見届ける、って約束したのになあ……」

【当日】に想い出のある人にとっては、全然ハッピーじゃない連休制度だ。

力なく立ち上がって居間に戻って来た鰥^{やもめ}夫は写真立てを表向きに

寝かせて炬燵机に置き、おれの前にそつと押し滑らせた。

産婦人科の寝台で生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた 遺影としては相応しくないのかもしれないが……【女】の一番幸せな笑顔を見せた瞬間が、そこには納まっていた。

「美人だろ？」

スッピンではあるが、確かに美人で……どことなく似てきた。

「僕には勿体無い位の……やっぱり、勿体無いって思ったのかなあ」
開けた襖はそのままに 末松忠は、座敷から遠い末席に腰を落ち着けた。

「……仏様は」

おれは……仏教徒じゃない！

「サウザー、って知ってるかい？」

「……北斗の拳っすか？」

199X年を無事に過ごした末松忠が、大きく頷いた。

「愛ゆえに、人は苦しまねばならぬ。愛ゆえに、人は悲しまねばならぬ」

不幸を前提に……それを不幸だとは感じない絆を紡ぐ。

「苦しんだって悲しんだって……そういうもんでいいんじゃないっすか？ 愛って」

愛ゆえに 乗り越えられる！

「富川の……家内の御両親がね、言ってくれたんだ」

「辛くなったら、いつでも別の居場所を求めればいい」

「誰も責めたりしないから」

「あの子のためにも幸せになってくれ、って……」

「僕は充分過ぎるほど幸せで……だけど、娘のことを愛してくれる男性を目の前にして……あの時の御両親の気持ち、やっと理解できるようになったよ」

「愛されることは幸福で……愛させることは、不幸なのかもしれないね」

「あの子がそう思っているかどうかはわからないけど……電車乗り継いで会いに行っちゃうんだから、そんなことはないか」

「生きてる間も……その後も……」

「まだまだ、これから色々と迷惑をかけると思う」

「一途であることが、真実の愛とは限らない」

「……僕が言えたことじゃないけどね」

「幸せが何なのか、考える機会が多くなると思う。自分にとっての……相手にとつての……」

「どんな選択肢を選んだとしても、後悔は残ると思う。それはとても重要な、分岐点だから……」

「たった一つしか未来に持つていくことはできないけど……正しいことはたくさんあるんだ、つてことを……」

「間違つてないよなあ……香澄」

古そうな振り子時計が「ボーン」とひとつ鳴ってから、もう一度ひとつ鈍い音を鳴らすまで　おれは一言も口を挟はさまず……素面の愚痴を聴き続けた。

7時だった。

酒の抜けた清水のおいちゃんは、異様にテンションが低かった。

彼の酈の所為だけではないが……あまり寝てないおれも、それにテンションが低かった。

まあ……睡眠時間に左右されず、おれの寝起きのローテンションは今日に限ったことじゃない。

紗唯は、ヘビーローテーションの制服に着替えて朝食の準備をしていた。

制服が可愛いからという理由で毎日のように着てるから　その

時はまだ、紗唯が学校に行くつもりだということに、おれは気付かなかった。

末松家の朝は、米派らしい。

森本家の朝は、ばあちゃんが入院してからパンになったようだ。

まあ、おれは高校に入る頃からパン派に転向してるから、その変化に関して異論はない。

と言うか、何を食おうが個人の自由だ。

家族だからって、無理に合わせる必要はない。

13年振りの……朝から味噌汁だ。

円卓には、その他に、たくあんの入ったプラスチック容器が1つと、目玉焼きとポテトサラダと小さいカニコロッケが盛られた皿が人数分並んだ。

あ、お茶もね。

それから、割りじゃない使い捨てじゃない箸も。

どっちが醤油かを紗唯に訊いて、おれは卵焼きにかけた。

清水勝生は皿全体にソースをかけた。

……普通、醤油だろ。

1階の寝室から起きてきて、父親がコタツに着いた。

外から戻って来た娘が、朝の挨拶をして新聞を手渡した。

番組欄にだけ目を通して、末松忠は空いている席に着いた。

ご飯の上に目玉焼きを乗せて……ほら、やっぱり醤油じゃん。

紗唯は、塩だったけど……。

昨日はそこら中ブラブラしていたが……家から歩いて3分くらいのところに、高校はある。

車を出すほどの距離でもない。

「送ろうか？」

「だいじょおぶ、いっぱい寝たから。ゆっくりしてって」

紗唯は当初の予定通り、1人で学校に出掛けて行った。
……おれのセリフは、間違ってたんじゃないだろうか？
遠距離恋愛中の恋人だったら。

2時だった。

おれは ばくすい 爆睡してた。

末松忠が9時半頃、携帯でパチスロ仲間らしき人物と喋っていた
とこまでは覚えてるんだけど……。

11時11分に着信があった。

山崎英伸 高校時代3年間同じクラスだった、今でも交流のあ
る友人だ。

彼は現在、工場で昼夜3交代4勤2休の12時間労働を強いられ
ている。

このご時世に忙しいのは有り難いことではある。

休みの日、偶に電話を入れてくる。

たぶん……パチンコの誘いだらう。他の用件で掛かってきた例が
ないから。

折り返したけど……電波の届かないところにあるか、電源が入っ
ていなかった。

寝てるだけでも、腹は減る。

大袋の一口チョコレートが、まだ半分くらい残っていたので……
アルファベットを組み合わせしてみた。

完成した。

ファミリーネームの7文字（ツはT U）を順番に食い終わったと
ころで、家主が帰ってきた。

ホストはゲストに、ヤマザキの菓子パンとコーヒーを淹れてくれ
た。

ヤマザキと言えば……トーストの形をしたリクライニングチェア

が欲しくて、点数を集めてハガキを3枚送ったけど、一向にモノが来ない。

発送を以って発表に代えさせて頂くタイプの懸賞だったから、ハズレ確定だ。

職業欄に、パイロットだとか作家だとかソムリエだとか　虚偽で埋めたのがいけなかったのか？

必ずもらえるお皿は、点数が集まる毎に当たるのに……。

わかったことは　いくら相手が知る由もないことでも、嘘はよくないということと……現在日本には、おれよりもラッキーなやつが2万人以上いる。

今日の山崎は……ツいてたかな？

3時半になった。

「いいですよ。誰かの夢を支援したいっていうの」
いつの間にか　そういう話題になっていた。

「普通は社会人になって自分の力でいろいろ叶えていくんだろうけど……時間がないから。娘が存在した、ってことをみんなに伝えたくてね……親バカだろ？」

「いえ……すごいです。そういう考え方できるの」
「すごかないよ」

父親は、照れ笑いをホットで冷ました。

「子供ができれば、みんなそうなるさ」
例外はいる。

その例外じゃないっていうのが、すごいことなんだ。

「この人は、偉い！」

……始まった。

ホームルームが終わったくらいの時間に……酒にめっぼう弱い力ツオから逃れるようにして、おれは来客用駐車場に乗り付けた。レヴィンの中からメールを入れると、すぐに返信があった。

何回かメールのやりとりをした。

道案内をする時に、リアルタイムで声の情報を利用できないのは不便だと　そういう機会は滅多にないから、別に構わないか。

今春に新築されたという校舎に着いた。

名義上は「新校舎」ということになっているらしいが……どう考えても、中高生をターゲットにしているとは思えない。

広いエントランスロビー、インフォメーションカウンターにオシヤレな帽子を被ったおネエさん　。

絵画にピアノに英会話に料理　案内図を見ると、確かにアーテイスティックな活動を支援するカルチャースクールではあるらしいし、人材の育成を目的としている部分もあるが……「生涯学習施設」と言ったほうが近いかもしれない。

一流ホテルのような外観の。

駅地下に無料駐車場があったから、車で来れば良かったと後悔したが……10分くらいのウォーキングも、たまにはいいか。

……何で駅自体は、古いまま残したんだろう？

駅前開発に際し、住民の様々な思惑が働いたのだろうか……おれが言及することじゃない。

紗唯の【旅立ち】に不都合が生じなかったのだから、おれ的にはモトモト無問題だ。

ここから電車に乗って　紗唯は来た。

赤い電車が出発するのが、上って行くガラス張りのエレベーターから見えた。

因みに……エレガはいなかった。

定員が1人増えると、回転率のアップに繋がる。

目方が2人分のやつにとっても、細身が1人いないだけで助かる

場合もあるから、喜ぶべきことだろう。

4階に到着した。

先ず、トイレに入った。

いや……レストルームと呼んだほうがいい。

今までおれが拝借した中で、一番綺麗だった。

トイレトペーパーで鼻をかもうと思って開けたドアは、どんな芳香剤かはわからないが、とてもいい香りがした。

丸めた鼻紙を水面に浮かべて……何となく、こっちで小さいほうをしてみた。

大を我慢できない人が立て続けに入ってきて、最後の人が間に合わなかったとしたら……いつかおれ自身にそんな日が訪れても、今日のたった1度の行いの所為で、おれには文句を言う資格はなくなつた。

腰を浮かすと、ソリッドを飲み込むくらいの大津波が押し寄せて

液体は、勝手に流れた。

30台以上ものパソコン（単一機種ではなく、複数メーカーの複数機種）やら周辺機器が並ぶその部屋を「デジタルーム」と命名したのは、新校舎設立に多額の出資をした理事長だそうだ。

誰も反対する者がいなかったのは……彼女が多方面に渡り、多大な権力を有しているという噂があるからだろう。

いくら何でも、静岡県民じゃない人間にまで影響を及ぼす力ではない筈だが……文句は言わない。

おれは、事なかれ主義者だから。

以前にテレビで見た、プレステ2のソフトを作っている企業のように仕切りのある空間は、Macブースになっていた。

おれがデザイン的に好きなCubeもあった。

今のおれの部屋には似合わないから、新家屋を作ったら買おうと思っていたが……いかんせん、金がない。

部屋を建て替えるどころか……新型のパソコンを買う金すら。

視線を部屋の中央に移すと、見覚えのある制服姿が6つ、SON

YのV a i oを囲んでいた。

椅子に座ってディスプレイを覗いていた女子高生が、おれに気付いて左手を軽く振った。

眼鏡を掛けていなかったから顔はわからなかったが 近くまで行ったら、やっぱり紗唯だった。

……そのうち、コンタクトにしよう。

液晶画面の向こうから ジュリアーノの縫^{すが}るような猫目が、視線を動かさずにじっとこっちを見詰めていた。

やはりおれには、救われる資格がないのだと その瞬間、ふと過^{よぎ}った。

撮った本人も……それはない！

と、思いたい。

紗唯は部員じゃないが、デジカメ部の連中に、時々写真の編集とかをしてもらうらしい。

編集と言っても、画そのものをイジるんじゃなくて、コメントを付けたり、枠組を入れたりする程度だ。

写真部じゃなく、デジカメ部かあ。

……いや、写真部は写真部でちゃんと存在してるんだろうけど……時代の流れだなあ。

クロロホルムの臭いが立ち籠る現像室は、確かに紗唯の体に悪い。嗅いだことないから、どんなかわかんねえけど……。

しゃぶしゃぶを食った。

食い放題の店で、清水勝生が奢ってくれた。

「放題」言っほど食えねえけど……他人の金だから、まあいつか。昨日の夕飯で予想外の出費を強いられたので、このタダ飯はラッキーだった。

金だけ置いて帰ってくれるのが一番ラッキーだが……そうは問屋

が卸さなかった。

昨夜聞いた話を、24時間経たないうちにそのまま繰り返された。どうでもいい話を覚えているのは、なぜだろう？

使えないという意味では、学校の勉強と何ら変わりはないのに……。

BSE騒ぎも一段落して、牛肉を扱う業界も復活していくだろう。特に焼肉は、日本の国民食の最たるものだ。

おれはそんなに食わねえけど……。

末松忠が飲まなかった（始めからその予定でカロリーを出したので、紗唯とはそのまま駐車場で別れた。

レヴィンのエンジンをかけ、携帯を見ると【着信あり】になっていた。

最新の着信は無視して 19時35分の、山崎英伸の携帯にリダイヤルした。

13連チャンして7万勝って、ファミレスでワインを飲んでる最中だった。

……独りで。

「残念だったな。来れば奢ってやったのに」

どうしておれと一緒にいくと、勝ってくれないんだろう？

って言うか、一緒だと勝てないのに、どうして相性の悪いおれを誘うんだろう？

明日の健闘を祈って、電話を切った。

行かなかった日は「負けなかったただけ儲かった」と思うことにしている。

出費ゼロでは収まらなかったが、この数日はそれ以上の収穫があった。

行きは高速を使ったが、帰りは 急ぐ必要がないから、下道を通って家に向かった。

よく考えると……ふたりっきりの時間がなかったような気がする。勿論、それが目的で静岡まで来たわけじゃないけど……。

これから　そのチャンスは、どれくらいあるんだろう？

今日中に、家に着いた。

母屋に入ると、エンジン音に気付いたおかんが2階から降りて来る足音がした。

20時前に電話をしてきたのは、こっちで間違いないだろう。

「明日、休みなの？」

洗面所のドアを開けたところで、後ろから声を掛けられた。

「仕事」

スリッパを履いて、歯ブラシを取った。

「連絡しなあかんて」

歯磨き粉を付けた。

「何かあったと思うやないの」

「おん」

歯ブラシを咥えながら生返事をして、次のドアを開けた。

「……早よ寝やあよ」

おれが小便体勢を整えたところで、ため息をついたおかんは寢床へ戻っていった。

6時間も7時間も寝てられるほど、こっちは暇じゃない。

便りがないのは、無事な証拠だ。

頼りないのは……塩基配列の所為だ。

風呂に入るのは、豪く久し振りのような気がする。

パンツを替えるのも……。

湯槽ゆぶねに浸かって、歌を歌ってみた。

迷惑がかかるほど、隣近所はそんなに隣でもないし近くもない。

距離的にも……付き合いたくもない。

おれは風呂場で歌を歌う人だ。

カラオケは金がかかる。

誘われれば行くが、自分から行くとは思わない。

デートの時はどちらからともなく。

便所でも歌う。

腹式呼吸が快い便通を助長して　そんな計算はしていないが、

5分10分の間をもたせるために。

下痢ピーの時は、必ずと言っていいくらい『LET IT BE』
を口ずさんでいる。

サビの部分しか歌詞がわかんないけど……空耳アワーに投稿する
つもりはなかったけど、昔は本当にそう聞こえていた。

どう頑張ったって、なるようにしかならない。

おれの人生も……紗唯の人生も。

伴奏とかがないほうが、キーだってペースだって自由にできる。

歌詞が間違ってたって、思い込みで歌える。

1人なら……不快な気持ちにはならない。

それ以前に、カラオケにあるのか？

影山ヒロノブの「夢光年」ってやつ。

ジュディマリ、西村知美、地球防衛組、清水宏次郎etc……

瞬、赤ら顔が浮かんだが　おれの中で水曜日に放映していたよう
な記憶のあるアニメソングを、約30分ぶっ続けで歌った。

専一夜

La Vieのお尻にUSBケーブルを接続して、文書をプリントアウトした。

A4用紙に有り余るほどの余白を作った真つ黒なMS明朝体は、何の面白味おもしろみもなかった。

一身上の都合 毎回そんなことはない筈なのに……定型句というのは、実に良くできている。

いつ詰問されてもいいように、ちゃんとした言い訳を用意しておかなければならない。

会社にはなく……紗唯に対して。

自分が重荷になっっている、と思つてほしくない。

そう考えている時点で、既におれ自身が紗唯を重く感じているのかもしれない。

でも……それを悟られるわけにはいかない。

どうして人は、働くんだろう？

「労働」と「仕事」では、微妙にニュアンスが違ふ。

働くことが自由意思で、1ランク上の生活を望む者だけが利益社会に参入するのなら、こんなにも不良債権が膨らむことはなかっただろうし、その処理もスムーズに行えた筈だ。

日本は豊かな国だ。

他国から嫉妬の圧力がかかるくらい……。

だから、社会保障も整備されている。

若者の生産性を、隠居した老人が食い潰す制度を「保障」とは呼ばない。

全ての人が働かなければならないという切迫感、パラサイトシルバーの意識改革ひとつで改善できる筈だ。

公的資金だつて【あるべき場所】に注入すれば、決して無駄にはならない。

トドのつまり、トップは金を自由にできる権力を有してはいるが、金の価値をコントロールできていない。

支配者になりたがる特殊な人間は、自分より優れた生物の存在を否定したい筈だ。

だから、金や会社といった無生物に支配されることを良しとして、その秩序の中でトップを目指す。

おれたち凡俗は、ルールを変える力も無く、働くしか生きていく術がないと諦め、人生の大半を労働に費やす。

金融システムも、結局は神ではなく人が創り出したものだから、人の意志ひとつでどうにでもできる筈なのに　崩壊の一途を辿っている。

限られた物を奪い合う手段として、金という交換価値は有効な制度ではあるが、生産力が向上した現代にあつて、貨幣はそれほど重要な役割を果たすだろうか？

時代の趨勢は、金を単なる数値のやりとりになくなっていく。

そこから苦しみや悲しみを読み取れる読解力のある子供たちが、どれだけ育つだろう？

……何で、人は働くんだ？

利益社会に属する人間は大勢いるが……生きがいを感じられる仕事に就くことができるのは、ほんの僅かしかないだろう。

殆どの人間が流されて　それなりに求められる居場所に落ち着く。

働く理由もわからずに、労働に明け暮れる。

おれも例外じゃない。

だから、今は【強制的な出費】を組むことで、労働のモチベーションにしている。

やりたい仕事が見付からないから、とりあえず学校に行って時間を稼ぐ　そんな幼い考え方が、未だに続いている。

まあ、暫くは失業給付金で　8ヶ月で自己都合退職……受給資格あんのか？

だけど、武士に二言はない。

ブスに言いたいことは、山ほど……。

封筒に、手書きした。

年賀状を返す時と、ご祝儀と……香典にしか使わなかった筆ペンで。

おれん家のプリンターは、そんなに仕事ができるタイプじゃないから。

おれが仕事を辞めても、日本のどこかでは就職するやつがいて幸福も金と同じように絶対数が決まっていて、誰かが幸せになるとどこかで誰かが不幸になっていて 紗唯が死んでも、世界のどこかでは生まれてくる命があつて……もう、寝よつ。

久し振りに、自分のベッドに入る。

自分で働いた力ネで買ったわけじゃねえけど……。

生きるために必要な最低限の衣食住は、名目上国が支えてくれていることになっているようだが 生まれてから今までのおれの暮らしは、おれ以前に生きてきた森本家の先祖の稼ぎによって成り立っている。

それは事実ではあるが、親に敬意を表す気持ちは起こらない。育てることを前提に子供を産むのなら、そのことに関して恩着せがましくクドクド言うのは間違っている。

と、父に不向きなおれは思う。

感謝されるかどうかは教育方針に左右されるが、どちらにしても……家庭を労働の口実にはできる。

「仕事とワタシ、どっちが大事なの？」

大切なものは、数えきれないほどある。

それらは全て、順番をつけられないくらい大切だ。

と、卑怯なおれは思う。

「一番大切なキミを幸せにするために、仕方なく働いているんだ。それぐらいわかるだろ！」

ありがちな口喧嘩だけど、男のセリフは正しいのだろうか？

もしそうだとしたら……仕事を辞めるおれは、紗唯が一番だと考えていない？

働きたくないから、紗唯を優先しているフリをしている？

紗唯が逝った後、愛する人の死を無気力になる言い訳に利用して働かずして、親類や友人から同情を買う。

その不労所得で、一生食い繋ぐ。

狡猾な頭脳は、そこまで計算して紗唯を受け容れた。

そして、邪なオレを否定する良心もおれの中にはあることを承知で、そいつが表に出て悲劇の主人公を演じることまで読んでの行動だ。

ずっと無職つてわけにもいかないから、働かなければならない理由を探さなければならない。

再三再四、履歴書の志望理由欄を虚偽で埋めなければならない。

……シボウ、リユウ……。

紗唯に詰め寄られることを想定して、余計な詮索をさせないような筋の通った理由を用意しておかなければならない。

そういう葛藤さえも、演出に過ぎない。

なんと浅ましいことか……。

少なくとも、今の仕事は生半尺な奇蹟が起こる可能性が高そうだから。

と、恋に不慣れなおれは思う。

だあゝっ！

自分の枕は眠り辛い。

自分で働いた力ネで買ったわけでも、度胸試しに店からパクったわけでも、強運を駆使して懸賞で手に入れたわけでもねえけど……。

2
0
0
2

E
V
,
S

E
V
E

3
章

フォーリングスター

引継ぎやら労働なんたら法に関わるやら　色々あって、正式に辞められるのは年末……ってことはないか。

クリスマスの前くらいになるだろう。

「そうかそうか」と言うのが、徳川家郎の口癖だ。

おれの辞表を受理した時も、少し間を置いてから、そう言った。

他には……何も訊かなかった。

他には　これといって特筆すべき出来事は、この月末に起きてはいない。

強いて挙げれば……10月より給料がちょっと良かったことくらいだ。

基本給は全く変わらないが、プラス歩合のほうでちょこつと稼げた。

貢献してくれた人たちに感謝しなければならぬ。

言葉に出すことはないだろうけど……。

メシ・フロ完備の家には一銭も金を入れてないし、ガソリン代もハイオクJAのカードで親父の口座から引き落とされている。

それなのに、ここ2ヶ月は　なんか預金通帳の数字の減りが大きい。

貴金属系の支払に給料の半分以上が飛んでいく現状を除いたとしても……。

結婚する予定もないのに……。

いや、その資格はもう失った。

結婚が幸福の最高峰に位置するとは考えていないが……彼女をフった瞬間から、おれの恋愛運の欄には一生【×】が貼り付けられることになる　それが、文字通り【罰】だと思った。

それをおれに悟らせるために、神はおれと紗唯を惹き逢わせたのかもしれない。

おれが犯した【罪】のために、紗唯は病に侵されて　彼女を取り巻く周りの人たちの人生まで、おれは不幸にしている。

世の中は自分を中心に廻っているのだと……天動説が、正論に思えてくる。

おれが金を貸すのは、ひとがいーからじゃない。

自分が困った時に救われる権利が欲しいから、困っている人に金を貸している。

本当に救われるかどうかなんてわからないが　ダメだった時は、思いっきり神に文句を言える。

何人も救っているおれには、その資格が充分ある。

おれは基本的に無神論者だが、都合のいい時にだけその【存在】を認めている。

信じてるんじゃないくて、認めているだけ。

そんな神が、おれを救ってくれるとは到底思えないけど……。

300万もの金が貸し倒れたら、人間不信に陥る格好の言い訳を手に入れることができるだろう。

目の前に飢えで苦しむ子供が現れて見殺しにしたとしても、誰もおれを責めることはできない。

高い授業料だったと、諦め……られるか！

大学の学費の二の舞はご免だ。

おれが払ったわけじゃねえけど……。

とにかく　大家平にはジャンジャン稼いでもらわないと困る。

他人に金を貸しといて、借金するなんてアホらしい。

言葉に出すことはないだろうけど……。

思えば　宝石屋との取引が始まってからだ、金運が乱れたのは同時期に、女運が突然舞い込んできた。

所長（今のところ、徳川家朗はおれの上司）の知り合いの姓名判断の先生（役場で登録できないような難しい漢字をふんだんに使った、中国人みたいな名前だったと思う）に診てもらったら、貯蓄ができない運勢らしく、おれの財は全て女に吸い取られるらしい。

金との相性が悪いんだろうか？
……女との相性がいいとも思えない。
どっちも、所詮は人間の産物だ。
やっぱり、自然の産物には敵わない。
と、思うことにしよう。

12時38分 メールを受信した。
77円レンタルのお知らせだ。

今日は店長の誕生日で、毎年何や彼ん^かやイベントをやっている。
と言つても、今年でまだ2度目なのだが……。
何故、77円なのかは不明。

星野監督を、未だに引き摺っているのかもしれない。
補足しておくが、愛知県民のみんながみんな中日ドラゴンズファンではない。

野球に興味すらない人だっている。
だから「どこのファン？」って訊いても会話が成立しないことがある。

相手が「ピストンズ」って答えても怒らないように。
当たり前だが、毎年喜寿を迎えているわけでもない。
まだまだ、おれたちよりも若い。

「たち」に含まれるのは紗唯ではなく、おれの幼馴染みでタメの椎礼琉。

このビデオ屋でバイトしている。
彼もいろいろ大変だ。

「彼」とは椎礼琉ではなく、渋谷福之新。
親の事故死で、突然ビデオ屋を譲り受け 経済学部を可もなく不可もなく無難に卒業した直後、経営学に本腰を入れる羽目になった…… タイミングの悪い青年だ。

……可はあるか。

でなきゃ、学士を修得できない。

って言うか、おれは会員でも何でもねえのに……新規開拓か？

浅宮要次（こいつも幼馴染み）にもこのメールは届いている筈だから、たぶん行くだろう。

あいつの場合は、コストパフォーマンスなんて大して関係ないだろうけど……。

おれは……今はまだ、遇いたくない。

あの日以降　雑誌の表紙の「おりおん」という見出しが目に入ってしまっただけで、ちよつと吐き気を催す。

だんだん仕事が増え始めて、忙しい日々を送っていそうだ。

おれのことなんて、もう忘れているかもしれない。

おれは、どれくらい時間をかければ気持ちの整理ができるだろう？

いや……きつと、時間じゃない。

何でそっち方面のことばっか考えるんだ？

桃暖簾の掛かったコーナーに入んなきゃいいんじゃない。

それでも、やっぱり……止よそう。

「西向く侍」というゴロ合わせがある。

31日までない月を、そう表す。

覚えてたって、何の得もねえけど……。

水平リーベ僕の船。七曲がるシブス、クラークか……使えねえ。

何でこう、使えない知識ばっか身に付くんだ？

ゴギョウ・ハコベラ・セリ・ナズナ・スズナ・スズシロ・ホトケ

ノザ　名称を羅列ふれつできたって、万病を防げやしない。

粥かゆなんて食わねえし……ゴロじゃねえか、これは。

2（に）4（し）6（む）9（く）は良しとして、サムライってどおゆうことやねん。

霜月　陰暦の呼び方でも、やっぱり関係ないやん。

まあ……あと11時間も経てば11月は11ヶ月後までやってこないから、深く考えるのは止そう。

12時49分 メールを受信した。

エロ系のやつ。

最近、矢鱈と送られてくる。

どっかの会社から、おれの個人情報みづうみが漏洩してんじゃないか？

企業間取引ってやつね。

情報公開はできないけど、情報交換はやり放題ってか。

まあ、いいんじゃない？

顧客が増えて、それでビジネスの幅が広がれば。

夜中だったり朝方だったり 同じような広告だから、送信者は不規則な生活を送っているに違いない。

興味がないから、着信拒否設定すればいいのだが……取説を開くのも面倒臭い。

メールと電話の基本的な機能だけ使えば、それでいい。
それから、時計と計算機と……。

12時56分 メールを受信した。

……忙しかったことにしよう。

ゾンビ

11月30日 これといって特筆すべき出来事は、強いて挙げられない。

……あ。

親父の誕生日か。

幾つになったか知らんけど。

幾つまで生きるか知らんけど。

たぶん、もう、死ぬまで……働かないだろう。

年齢的に仕事が無いという先入観があるのかどうかわからないが、解雇された後何回か職業安定所（いつからかハローワークって呼ばれるようになった）に通っただけで、今はずっと家の中でクロスワードパズルを解読している。

当然、無償で。

懸賞に送ったら、ナンか当たるかもしれんけど。

働かないなら、家事をやれ。

稼ぎがないなら、タバコをやめろ。

あの閑暇に、羨ましいくらい腹が立つ。

これといった用もないのに、おれと同じくらいの時間に起きて、同じくらいの時間に新聞と折込チラシをつて、同じくらいの時間に洗面所を占拠して フレックス制度は導入されていないのか？

四人しか住んでなくて、カブるってどおゆうことよ。

まあ……会話を持ちたくないから、口に出して文句は言わんけど。学生時代のおれも、ブルーワーカーだった頃の親父の眼にはムカツク存在として映っていたかもしれない。

違うのは あの際のおれは未知数のガキで、現在の親父は利益社会から除名されて復帰が絶望的なことだ。

若いつてことは、それだけで可能性だ。

少なくとも、雇用主はそう判断する。

嫌な

世代交代だ。

D
e
c
e
m
b
e
r

E
V
E

4
章

ネイル

ドライヤーのプラグをコンセントから引き抜く時に、ビデオデッキのデジタルを覗いたら　12月になっていた。

鴉カラスの行水を見たことがないから、確かなことは言えないが……おれが浴槽に浸かっている時間は、それに近いほうだと思う。

フリーズドライ製法ではなく、生麺タイプで軽く湯通しする程度だ　と言ったら過言ではあるが、逆上のぼせて立ち眩くらみを起こすことが屢しばしばあるから、熱い時は特に長湯をしないよう心掛けている。

しかし、今日……じゃない。

昨日は、いつもより長かった。

入浴剤が乳白色だったからじゃない。

睡魔と熱戦を繰り広げていたからでもない。

微温湯ぬるま湯に浸かっていたわけでもない。

人生の話じゃないから……。

案の定、洗い場と浴槽を隔てる高い敷居に腰掛けて　治まるのを待った。

何でこの高さなのか、よくわからない。

そこだけ掘るか、建物全体をボトムアップするか……プールみたくすりゃいいのに。

危なっかしい。

そのうち怪我人が出るぞ。

おれ……じゃなくても別にいいが、今度家を建てる時はバリアフリー設計にしなければいけない。

プールでおしっこ　ケガした人間が言うセリフじゃねえけど……。

先生の言う通り、プールサイドは走っちゃいけない。

「激しい運動は控えるように」と言った主治医は【その行為】に関して、何か注意事項でも挙げただろうか？

……イチイチ相談も報告もしないか。

携帯の請求書が入っていた封筒の、のりしろの部分を手で破ってパーティー開き風に広げた。

備えあれば憂いなし。

あれは、ウソ。

どれだけ備えたって、メチャメチャ憂いはある。

おれに限ったことかもしれないけど……。

一応 爪を切った。

AV男優ほどじゃないが、おれの中ではかなり深爪の部類に入る。おれはボーリングをすると、親指（右利きだから、右手）の爪が変な角度で割れる。

その度に、親指の右上（人差指に近いほう）だけが力けた異形の深爪になる。

カルシウム不足かもしれない。

背も伸びなかったし……。

根本的に、学校給食が間違っている。

毎昼食、ご飯に牛乳で……。

まあ、パンの時もあったけども。

それがなければ、もっと飲んでいたかもしれない。

基本的に、牛乳嫌いではないから。

まあ……金を出してまで飲むとは思わねえけど。

後悔後立ち。

今ある選択肢に、後悔しないものはひとつもない。

十指を、深爪切り男 フカヅメキリオ 状態にした。

柄に付いている普段は使わないヤスリで、引っ掛かりがないように面取りもした。

序でに、足の指の爪も切った。

こっちはいつもと変わらない程度に。

たぶん……ソレで、紗唯を傷付けるようなプレイはしないだろうから。

爪を切ったくらいで、急にテクニクが身に付くわけでもない。
おれには紗唯をイカすことができないだろう。
生かすことも……。

散乱した破片を中央に寄せて落ちないように丸め、請求書在中を
ゴミ箱に捨てた。

夜中に爪を切るのは縁起が悪いが……今のおれに不幸を感じ
させる事象は、今のおれには見当が付かない。

森本家の家事担当者の訃報を聞いたとしても、だ。

これから何かと不便になると思うことはあるかもしれないが、そ
れが不幸だとは思わない。

望みもしない組み合わせのTCGAを新たに生成した親には、運
命に問責される義務がある。

死は、繁殖する生命体全てに強いられる贖^{あがな}うべき当然の報いだ。

であるならば、遺伝子を未来に残せない紗唯が今を生きられない
ことは、不自然だ。

もしも……生命を産む経緯にある行為でさえも贖罪^{しよぐわい}の対象になる
のなら カラダが繋がりが合うことで、素直に受け入れられるのだ
ろうか？

紗唯の命運も……いつか必ず訪れる自分の死も……そして、罪深
き彼女の。

観賞し終わったDVDをMeibiusから出して、ケースに戻し
た。

あ。

辞表を提出した日の夜、MURAMASAを購入した。

懷に余裕はないんだけど……かなり思い切った。

HDD機能に魅力を感じたからじゃない。

デザインと……名前の響きで、最初から「コレ」と決めてエイデ
ンに行った。

ホイールパッドでカーソルを移動させる時、予期せずクリック状
態になってしまうからマウスも。

ホコリで動きが鈍くならない光学のやつ。

少し時間にゆとりができるだろうから、タブレットまで……衝動
買った。

またもや、田中且行の時間を奪ってしまった。

テレビの時ほどじゃねえけど……。

La Vieはおれの私物だが、最期まで社用で使うことにした。
拾う神があれば、その後くれてやるつもりだけど……こんな縁起の
悪いプレミアの付いたノートパソコンを欲しがるやつなんて、滅多
にいないだろう。

両サイドのPUSHボタンを押してコネクタをケツから抜き、充
電ランプが消えた携帯を開けた。

紗唯がやって来る。

カローラも同伴だ。

こっちで1泊する。

最新の着信履歴を閉じた。

プレゼントが要る。

誕生日に逢うから、

ってわけでもない。

恋人同士だったら、

自然に求めるコト。

返信内容は、正夢に託すことにしよう。

こうやって悩んでること自体、おれにとっては夢のような話だけ
ど……。

逆夢にならないことを祈って……。

アラーム設定を確認して、枕許に置いた。

12月1日1時21分 液晶画面の灯りが消えた。

部屋の灯りを消した。

ベッドの角に左足の小指をぶつけて、敷布にそのまま、うつ伏せ
で倒れ込んだ。

治まるのを、待った。

大好きなおにちゃん

また……

大好きなマコっちゃんと

声が

セックスがしたいです

ダブった。

レナードの朝

徐々に強暴に鳴る警報に、現実世界に引き戻された。
と言っても、夢は見なかった。

覚えていないというのが正しいのか？

見ているのかもしれないが、レム睡眠時に高速眼球運動が映し出す幻影を、今朝のおれは全く覚えていない。

深くいところから一気に召喚された感じだ。

相変わらず、目覚めは悪い。

生まれた瞬間に眠っている赤ん坊はいない。

だから、人それぞれ体内時計が違つて当然だ。

強制的に起こされるといふのは、自然の摂理に反している。

自分が何時に生まれたのか知らねえけど……。

人間が創り出すモノは、全て不自然だ。

金も会社も、不自然な秩序だから破綻する。はたん

今度は、もつと遅起きできるトコに束縛されよう。

雇ってもらえれば、の話だが……。

職業選択の自由が認められてはいるが、法律なんて無いに等しい。

法律を学ぶ人間だつて振るいにかけられる。

それで法治国家を謳つてんだから、笑わせる。うた

義務教育で法を学んでいないおれが、法に裁かれる義務はない。

民事にしろ刑事にしろ、おれの罪を取り扱ってくれる裁判所があるとは思えないが……。

想像以上に、眠れ過ぎた。

……その程度の問題意識だということなのだろうか？

疲れ知らずの精神がどんなに病んでいても、悩み知らずの肉体は悠長に休息を欲する。

人生の1クォーターを奪つておいて、アドバイスひとつ無しかよ。つたく！

まあ……見たかもしれない悪夢に気付かなかったただけでも、良しとするか。

さて どうする？

アイフル。

……とりあえず、メシだ。

いや、パンだ。

パンダ？

……白黒はつきりさせねえと。

クールランニング

1週間レンタルのDVDを、1泊で返した。

無料だからと勧められるまま会員になって 80円払った。

消費税5%を込めると、釣りが渡しやすい金額になる。

但し、これは1本の場合のみ。

2本だと1円、3本だと2円、4本だと3円、5本だと4円、6

本だと5円、7本だと5円、8本だと6円、9本だと7円損をする。

小計に対して税率が加算される そういうレジのプログラム。

そういうことが気にならないのか、みんな纏めて御愛想していた。

流石に……10本借りていった浅宮要次は、まだ返却には来てない
さすがいそいだ。

早送りして、又きどころを探す。

じやなきや、ふたつの籠から溢れ出すほどのビデオテープを最初から最後まで見ている暇はない。

毎日5400分もドライバーズシートに座っている浅宮要次が、

そのためだけに1週間で600分以上の時間を作るわけがない。

いくらテレビデオを搭載したトラックだからって、余所見運転は
よそみ危ない。

業務上過失致死でもやった日にゃあ……もう借りられなくなる。

色んな意味で。

結構なハイペースで借り捲っているように思えるが 十川謙哉

も、好きだった。

もじゃなくて、はにしないと誤解されるか。

彼の場合は、レンタル専用のビデオじゃなく、劇場公開され且つビデオ化された洋画を借りて余暇を過ごしていた。

最後に借りた作品は、子供が主役のばかり3本……それが原因か
かはどうかはわからないが、酔っ払い運転車輛から少年を庇って 轢
ひかれた。

おれが返却した時に払った延滞料金は、永遠に催促できない。

惹かれると言えば　そんなに短いスパンで、多くの新人がデビューする業界なんだろうか？

浅宮要次は……あいつだけじゃない。

彼ら傍観者は、どういう感性で他人のセックスを観戦しているんだろう？

AV　　と言っても一言では語り切れないが、その殆どが男性向けオナニーのおかずとしての価値しかない。

「しかない」と言うのは、おれが個人的に作品として、そういうスタイルを望まないし好まないからだ。

視聴者がやっているのは、女優との擬似セックスじゃない。

明らかにオナニーだ。

おれも、2回又いた。

本格的なカラミじやなく……手コキとフェラのシーンで。

若い頃は、恋愛の延長線上にセックスがあると思っていた。

そこに至るシナリオを自分で勝手に考えて、カワイイ女の子と擬似セックスをしていた。

その理想は　好きだったAVギャルの真っ黒になった乳首を見て、冷めた。

とことん非現実^にに徹したつていい。

射精した直後に【終焉】が訪れる、オトコのあっけない現実を表現する必要はない。

女性のオーガズムのように余韻がある【エンディング】を用意すれば、物語としての幅は拡がる筈だ。

これは全部のおれの私見だが、セックスのあるラブストーリーという感覚の作品があってもいいと思う。

月9とかで放送できる程度の恋や愛は、核心に迫っていない。

いや、寧ろ夢想をテーマにしているのかもしれない。

それなら、セックスのないラブストーリーでも充分に説得力があると言えよう。

どれもこれも　夢のような話ばかりだ。

セックスが至上の恋愛表現だなんて思っていないおれが、こんな御託宣ごたくせんを並べるのも何だけど……。

又けるから泣けるへ　一見、誰も求めそうにない場所にこそ【市場】はあると確信している。

おれに女性的な感性があるわけじゃなく……ただ、男性ホルモンが不足しているだけだ。

噛めない食感がイヤ。

って、そっちのホルモンかよ！

「焼けよ、焼肉なんだから」って気持ちが行先するから、ユツケは食わず嫌い。

ブレイブハート

「後悔のない人生はない。それだけ重要で意味のある岐路^{きろ}に立つて未来を選択するから。現在に於いては、全てが正しくて全てが間違っている」

脳内で【言葉】が交錯する。

おれの心には自己監理責任能力がない。

だから、頭でしか考えられない。

心のままに生きられるほど、おれは強くない。

いや……強さとは言わないか。

とにかく 時間が解決してくれる問題じゃない。

おれが決めないことには、アナログ時計の針は1パルスも進まない。
い。

選挙権すら、一度も行使したことがないのに……。

おれは支配者じゃないから、こっちは止めてあつちは流す な
んて、器用なことはできない。

進まないのは、ココロの奥にある時空を超越した次元で……支離滅裂だな。

ただひとつ確かなことは、おれがどうであれ、紗唯の秒針は刻一刻と セットされた【アラーム】に向かっている……。

紗唯には残り時間がない。

だから、後悔させちゃいけない。

満たさなきゃいけないし、おれ自身も満たさなきゃいけない。

最悪、そう演じなきゃいけない。決断が、同情だと勘違いさせちゃいけない。

だから……そこには触れられない。

紗唯には……罪がない。

だから おれ自身の枷を曝^{ひら}け出さなきゃならない。

……あれで、良かったんだろうか？

鼻の下まで湯に浸かって、返信内容を思い返してみた。

着信から約9時間考え抜いて出した結論は　【メール】ではなく【手紙】だった。

紙に、手で書いた、直筆の、文字通り　手紙だ。

ポストに投函するのではなく、直接郵便局の窓口にいる職員に「速達で」と言って手渡した。

抽象的だと信じてもらえないと思ったから、具体的な固有名詞を出した。

見ず知らずのオンナを引き合いに出されて……それでも紗唯は、架空の人物だと思っているかもしれない。

おれは、リ力を拒んだ。

リ力は訊かなかったから、おれはその理由を口に出さずに済んだ。リ力は自分に非があると思い込んでくれただろう。

だからおれは、リ力の仕事を言い訳にできた。

「勿体ない」

おれとリ力が付き合っていたという事実を知っている連中が拳^{こそ}つて吐くセリフは、全くその通りだと思う。

おれと過ごした数ヶ月は、リ力にとって　全くの無駄だった。

真実は……リ力だったからじゃない。

相手が誰だろうと、おれは性交渉を避けるつもりでいた。

おれには生まれつき枷がある。

極めて肉体的な欠陥だ。

イブが禁断の果実を口にしなければ、その系譜にあるおれだって羞恥心に気付かないガキのままでいられたかもしれない。

体格がガキと変わらないことは……もう諦めている。

そのことに関して、両親を責める気はない。

確かに両方とも小さいほうだけど、こいつは身長はと違って、遺伝ではなく突然変異による代物だから……彼らに過失はない。

寧ろ感謝している。

それすらも言い訳にすることが出来るから……。

しかし本当の真実は、極めて精神的な枷にある。

これは、生まれつきではない。

森本誠を形成するにあたって、誰かの影響を受けた記憶はないか

ら……おれ自身の選択ミスの 罪重ねだ。

おれにも恋愛は許されているんだと気付いた時には 修正する

選択肢が、どこかに消えてなくなっていた。

50・50が誤作動を起こして、みのもんたが焦る姿が目には浮かぶ。

おれは……セックスが怖い。

現実、理想を汚す。

おれの憧憬も、パートナーがおれに抱く幻想も。

喘いで歪む醜い表情が嫌い。

それほどの快楽を与えられる自信がない。

他人のセックスを觀賞してスる自慰行為は、そういった不安を払拭するためのだ。

だから、射精した直後、どうしようもない罪悪感に襲われる。

独りじゃ、相手を満足させたという達成感を得られない。

それでも、求めようとはしない。

セックスが切っ掛けで嫌われる喪失感のほう、好意を利用して肉体関係を結ぶ快楽よりも先行してしまう。

全ての人間はセックスで生まれてくる。

故に、セックスに不向きな体と心が同居してしまうと、存在そのものを全否定されるような感覚がある。

セックスをしているおれのイメージが、わからない。

セックスが、わからない……。

不用意に息を吸った瞬間 鼻から湯を飲んで、嘔吐した。

寝入る

エロ系メールは1件あったけど……他にはない。

こっちがメールを返していないからだな、絶対。

もう寝ている　なんてことはだろう。

昨日が今日の早い時間まで起きていて（わかり辛い言い回しだな）メールを送ってきたんだから、たぶん今日もすんなり眠れるとは思えない。

おれ以上に不安があるに違いない。

「手紙を郵送しました」というメールを送信すれば、ちよつとは気が紛れるのか？

……いや、余計に気なるだろ。

とにかく　明日だ！

紗唯との実現が現実味を帯びてきて……今ではもう有り得ない、リカとの過去を想う　そうやって現実逃避する自分に、嫌気が差している。

性格を変えるのは、簡単じゃない。

いや……変えられる運命にある人間にしか無理だ。

おれは……変革なんか、これっぽっちも望んじやいない。

目の前のことを考えないように、楽なほうへ楽なほうへ　。

「若いうちの苦勞は買ってでもしろ」と、年寄り言うが……余裕がない。

財政難という意味では、これも立派な苦勞と言えるかもしれないけど。

超高齡化社会だからって、与えられるだけの老人が文句を言う筋合いはない。

今、おまえらが苦勞しろ。

少子化のサイクルは経済的な豊かさが見込めれば、無能な政府が何の策も講じなくてたって勝手に歯止めが掛かる。

あの時は……都合良く、十川謙哉が逝ってくれた。

だから、暫くはリ力を避けたという現実を忘れることができた。
友人の死でさえ言い訳にして……おれは薄情だ。

罪は おれ以前に始まっていた。

おれは、イブよりも初心だ。

裸であることの 心を丸裸にされる羞恥心を払拭しない限り、
長い時間を他人と一緒に過ごすことなんてできない。

いずれは 種を繁殖させる術が、セックスではなくなるかもしれない。

しかし、現段階において……おれのような人間は、世代と世代の
繋がりに存在するべきじゃない。

昔聞いたことのある、命の蠟燭ろうそくの火の話 死にかけのやつと交
換できるなら、そうしてほしい。

楽になりたい。

今日は 今日のうちに、毛布と掛け布団を頭まで被かぶった。
すぐに眠れるかどうかは別。

かなり寒いから……ファンヒーターの灯油、もったいないから。

2

B
i
r
t
h
d
a
y

5
章

ドライブスルー

おれの外廻り営業は、先月末で打ち切りになった。
営業所の中に缶詰だ。

売れっ子マンガ家になったら、こんな感じかもしれない。

物件のデータ整理やら引継ぎ用の書類やら何やら 事務的な作業から解放されず、定時まで只管ひたすらデスクワークに勤しんだ。

ちよつと遅めの昼メシを食いに吉牛へ出張っただけだ。

歩いてても疲れない程度の距離にあるのだが、車を出した。

何となく……洗車してみようという気分になったからだ。

今までは休みの日に自分でレヴィンを洗っていたが、時間が作れなくて……それ以前にやる気も起きなくて、ここ2ヶ月くらい洗っていないかった。

いくら看板に「布」という文字が誇張してあっても、キズが付きそうで怖かった。

金を出してまで、わざわざリスクを背負う必要もない。

が……初めて、ガソリンスタンドにある洗車機に通した。

預金通帳を出そうと思ってダッシュボードを開けた時、藤吉秀彦にもらつてすっかり忘れていたタダ券が出てきた。

二車単56・3倍に1万円賭けて儲かったお零こぼれが、これだ。

会社の後輩（あつちが結婚を決めた時まだこっちは退職が決まっていなかった）として招待されているから、来月にはご祝儀も出さなきゃならない。

相当の引き出物をもらわないと、割に合わない。

まあ……もらいモンだから文句は言えねえけど。

出光に入ったのも、これが初めてだ。給油もせずに……という罪悪感、おれにはない。

コンビニでトイレだけ借りたり立ち読みだけして店を出たりすることは多々ある。

そういうのも全部ひつくるめた【サービス】だと思っている。

今すぐ必要としないハイチューとかを「水道代とトイレットペーパー代の足しにしてください」という勘定科目で無理に買うことはない。

泡混じりの集中豪雨に見舞われている最中、メールが届いた。

普通の……だった。

心配して損した。

金を賭けたわけじゃないから、それほどの大打撃は被らなかつたけど……路駐した時に見廻して見たボディは、綺麗なものだつた。

何週間か何カ月か後に 300円を捻出できたら、たぶんまた利用するだろう。

労力を使わない、楽なほうへ そこにビジネスチャンスはあるのだろうが……愛車への想いが、だんだん薄れていく。

愛社精神も稀薄だし……。

給料が入っても、相変わらず並だが……初めて「ダクダクで」と注文してみた。

肉の量が少なく感じた。

いや……玉葱が多い分、実際にそうなのかもしれない。

店内では紅生姜と一味が摂り放題なので、食べては足し食べては足していった。

底の米まで汁の味が染みていた。

この生活が、たぶん あと2週間くらい続くだろう。

……普通の「並一丁!」で、いつか。

……普通を装って、返信した。

エンジェル

その日の予定が完了すれば、職人さんはすぐに帰る。時間が余っても、決められた以上のことはやらない。

明日できることを前倒しして、今日の時間を潰すようなことはない。

計画も現実的だし、実現する腕も確かだ。

スジ屋並みの段取りの良さだ。

スジ屋さんっていうのは、電車なんかのダイヤグラムを組むお仕事をしている人。

限られたレールの上で、正面衝突しないようオカマを掘らないように、運行表に線（スジ）を引いていく。

緊急車輛のこととも考えて、ちゃんと空白を作るテクニックを必要とする。

そういうオモテにはないダイヤを……裏スジと呼ぶらしい。

流石は、職人。

改装期間に余裕があり過ぎるのも、一理あるが……。

ガラス張りの店舗を通りから覗いた時には、既に業者はみんな引き上げていた。

照明は点いてない。

真っ暗だ。

もう　冬だ。

おれが大家平のフラッツに着いたのは、エンジンを切る前に見たレヴィンのデジタルクロックで、18時27分　今朝ケータイの時間に合わせたから、間違っていないと思う。

兵庫県明石市まで行って、時刻調整したわけじゃねえけど……。

管理人室には、管理人と　遠方からの客人がいた。

福建省から来た留学生は、奢ってもらったサントリーの烏龍茶をどう評価しているのだろうか？

翻訳家になって、日本の時代劇を中国に広めたい　それが、陳さんの夢だ。

おれは日本の文化になんてあんまり興味ねえけど……内側にいるから、良さが見えないのだろうか？

もしもおれが中国人に生まれていたら、カンフーを見てスゲーとは思わなかったかもしれない。

もしもおれがフランス人に生まれていたら、三銃士の戦闘スタイルがカッコイイとは思わなかったかもしれない。

もしもおれがイタリア人に生まれていたら……スプーンを使わずに、スパゲッティを上手いことフォークに絡ませて食べられるようになっていたかもしれない。

それにしても……こんな複雑な言語、よく覚えようとするもんだ。我輩は猫である。

おいどんは西郷でござす。

拙者服部半蔵と申す。

あつしは遊び人の金つてえケチな野郎でさあ。

ぼくドラえもん。

オラ悟空。

わしや亀仙人じゃ。

ぼつくんは大金持ちぶあい。

私は花の子です。

俺の名を言ってみろ。

自分は不器用ですから。

おいらはドラマー。

ウチだけを見てほしいっちゃ。

1人称だけでも、まだまだあるのに……。

あれだけの人口が、みんながみんな勤勉になったら、あつという間に世界のトップになれる。

何だ彼んだ言ったって、最終的にモノを言うのは、やはりマンパワーだ。

そういうことにしておけば……日本経済衰退の言い訳になる。

陳さんと入れ替わりに 末松家が到着した。

時間潰し（おれ待ち）に、インテリアを見て廻っていたそうだ。

イームズとかヤコブセンは聞いたことがあるが、サーリネンという名前は初めて聞いた。

ウームチエアが有名ならしい。

ウームって、何？

うゝむ……。

って言うか、ミッドセンチュリーは毎世紀訪れるわけだから

これからも50年代前後に革新的な流行が生まれたら、そのワードだけじゃ、何千何百年代なのかわからなくなる。

まあ……細かい知識なんかなくなつて、良いデザインの物を「イイ！」と思えるセンスさえあれば、生活はより豊かになる。

紗唯の学校の制服は、何年か前に卒業した生徒の原画を基に、遺志（？）を受け継いだ美術部の後輩たちが発足した制服製作委員会（顧問はなぜか、数学教師）が年内に完成させ、翌年の新入生から採用されたらしい。

ヤンジャンの制コレでアイドルの卵が着てもおかしくなくらい、かなりイケてるデザインだと思う。

水色のカッターシャツ。

蝶々結びにした襟の青いリボン。

紺青のジャケット。

インディゴとクォーターグレイが交互に重なり合うチェック柄のスカート。

膝下まである白いルーズソックス。

淡いピンクのスニーカー。

茶がかったストレートヘア。

透き通るような、真つ白い肌。

珍しく両手で紙袋を提^さげていた以外は、至^さっていつもと何ら変わらない筈の紗唯だが……何かが違う気がした。

レヴィンの錠を遠隔操作で解除して、おれは助手席のドアを開けた。

カロラの助手席側の後ろのドアから私物を出した紗唯は、レヴィンの助手席に膝を突いて後部座席にリュックを置いた。

後ろ姿を見て 違和感の理由が、理解できた。

バッグが違ってただけじゃなく、バックも違ってた。

15センチか20センチか……腰の上まであった髪が、短くなっていた。

自然に縮むことは、ない。

タモさん風に「髪切った？」と訊く そんな機転が利くほどの余裕が、おれにはなかった。

「生えなくて悩んでいる人が、世界中にどれだけいると思ってんだ？」

シュナウザー犬は毛が抜け難いというマメ知識も、ツラ……

すらっと思い浮かばなかった。

女性が髪を切る時というのは、大概……おれの所為だ。

あの手紙が、そうさせたに違いない。

歩んできた歳月を物語る象徴を、約1ヶ月の誤りを清算するため

に 紗唯は、心機一転を計った。

まだまだ寒くなるから、バスサリショートとはいかなかったようだけと……。

大家平は、カロラの助手席のドアを閉めた。

末松忠は、カロラの運転席のドアに鍵を挿して回した。

施錠を確認して、アルコール班はそそくさと街のネオンに溶けていった。

御見合いに付き添った親のように……。

そして 若い者同士が、ふたりつきりになった。

沈黙を破ったのは、

「ハッピーバースデー」

……若いほうだった。

「ハッピー、バースデー」

眼鏡を掛けていなかったから、紗唯の瞳がはつきり見えなかった。いや、見えなかったのは……逸らしていたからだ。

「はい」

両手を伸ばして胸の高さまで上げ、紗唯はおれに紙袋を差し出した。

右手で受け取って、中を覗いた。

左手で掴み上げると、それは解れて拡がった。

「手編みだよ」

マフラーだった。

幸福の黄色い……あ、車のじゃないよ。

人力じゃ、解すのムリ。

おれがバースデープレゼントをもらうのは、これが初めて……じゃないか。

けど、女性からは初めてだ。

おかんやおばあは、分類学上別の類たぐいに属する。

紗唯が、残された時間の全てをおれと過ごさなかった理由のひとつは、これかもしれない。

すごい先見性だと思った。

すべきことを時間ごとに、1個1個区切っていけば……おれも、計画的な人生を送れるのだろうか？

おれは……何も用意できなかった。

それどころじゃないくらい、パニックってた。

夏休み最終日に、40日分の日記を書いたり2学期が始まってから自由研究に取り掛かる　そんな心境だ。

【おれたちの誕生日】のシナリオは、前日になって急遽描いたが……【紗唯へのバースデープレゼント】は、何ひとつ用意してなかった。

いや……これでいいんだ。

カタチとして残る物なんて、きっと紗唯は　。

「ねえ、して」

と言われ おれが無造作に首に巻いたマフラーを、紗唯はいい感じに整えてくれた。

自分じゃ見えねえし、それ以前にセンスがねえけど……。

新妻にネクタイの曲がりを正してもらっている旦那のような感覚だった。

狭い路地にも歩行者がいて、少し照れくさかった。

黒いスーツに黄色いマフラー 現時点でおれが自分の姿を見る術は、紗唯の瞳を鏡にするしかない。

しかし、その照れ笑いが……至近距離で、紗唯から眼を逸らす口実にもなった。

あ、ドアミラーに映ってる。

でも、裸眼だから見えない。

マフラーなんていうファッションアイテムを 然も、オシヤレ

さんみたく巻くなんて、初めての経験だ。

中尾彬が特許を取ってたら使用料を払わなきゃならないので、あの真似はしない。

小学校4年生の頃、ブランコ^{ねじ}振ってくるくる回す遊びが一過性で流行った。

給食のミルクを吐いた子もいた。

良い子は、真似をしない。

「サンキュ」

軽く礼を言つて、フロントから運転席側に回り、ドアを開けた。

ギアが抜けていることを確認して、エンジンをかけた。

『スピード』が流れてきた。

まだ走り出してないのに……。

もう 12月だ。

今月いっぱい、クリスマスソングを聴く機会が多くなるだろう。右下にルージューを滑らせたような筆記体の英字（読めない）が踊る白い紙袋を折り畳んで、ヘッドレストの耳元から後部座席に落と

した。

助手席に乗ってドアを閉めた紗唯は、シートベルトを締めて背凭れに深く収まった。

マフラーをしたままドライバーズシートに座って、おれはエアコンを入れた。

……何だろう？

まだ、違和感が残っている。

暖気運転の間を持たせるための会話を探した。

「あの、こと……だけどさ」

核心に触れた。

「高級なところでしょ？ 楽しみだなあ。悪いなあって思ったら悪いから、今日は思いっきり楽しませていただきます」

「いや、メールじゃなくて……その」

「紗唯に出逢う前、おれはリカという女と付き合っていた。おれには生まれつきヘソの所にアザというか……ホクロの集合体みたいな醜い物体がある。それを見せたくなくて、裸の關係を持たずに別れた。求めたり力を、おれは拒んだ。でも、それは言い訳に過ぎない。本当の枷は……おれがセックスに怯えていることだ。子孫を残す手段は、生まれながら遺伝情報として体が覚えているだろう。でも、考えてしまう。頭では、どうしていいかわからない。リカのこと、紗唯と同じくらい好きだった。それなのに……隔心の革新には至らなかった。だからおれは、セックスを許されない男だと思っている」
手紙に託したおれの【初告白】を、紗唯は完全に暗記していて、空で言った。

何度読み返したのか　一読しただけかも知れないが……信じてくれただろうか？

ぼんやり眺めていたウィンドウスクリーンの奥から、視線を外した。

「紗唯は、天使だよ」

アッシュトレイに伸ばした左手が、一瞬止まった。

「恋のカミサマの、おつかい」
眼鏡を、掴んだ。

「おにいちゃんも許されてるんだって、伝えに来たの」
視力が、急激に向上した。

「それが終わったら、天国に帰るの」

ヘッドライトを、点けた。

「役目を果たすことは、もう運命で決まってるんだ」

確信した。

「だから紗唯には、ちょっとしか時間がないんだよ」

この天使の想いを救い、自らの心も解放される　それが、理由も知らずに生まれてきたおれの…… 最初すっばんの存在意義だ。

背負う苦悩の絶対量が、紗唯とおれでは月と鼈もろだ。

おれがどんなに肉体的な醜さや精神的な脆さで、人生をネガティブに考えていようと　じわじわと歩み寄る死の足音が聴こえてしまふ恐怖には、到底及ばない。

三十年後に生きていることが当たり前のように、みんな老後の年金を心配する。

生命保険の予定利率の引き下げを憂うれえる。

明日も見えないこのご時世に…… 自分に未来が訪れることを信じて疑わない。

そいつらと同様に、おれには【必ず死ぬ】という切迫感も、圧迫感もない。

「紗唯も、許してもらえないかなあ」

シートポジションを最前列まで出した。

「おにいちゃんは優しいから…… 同情で、だったらエッチしてくれるよね？」

シートベルトを締めた。

「大好きなおにいちゃんと、セックスがしたいです」

紗唯の声だけが、響いた。

「同情なんかで抱いてほしくない」

と思っっているだろう、という言い訳を用意している自分がいた。

おれがそれを言葉にしなくても、紗唯は自分の状況を全部把握している。

だからおれは、ワルモノにならなくて済むし　ワレモノのような……体も心も、曝け出さずに済む。

しかし　覚醒した。

払拭されない違和感は……おれ自身が作っていた力べだ。

紗唯に死を感じさせないように　そう努めて接することで、おれは紗唯に辛い思いをさせていた。

打ち明けてくれた事実を……恋人として受け容れた時点で「死」は禁句ではなくなった。

たったそれだけのことに1ヶ月弱も気付かず……紗唯にとっては、1秒だって無駄にできない大切な時間なのに……28になって漸く

なんて鈍感なんだ、おれは。

今こそ、おれの中の弱さを廓清かくせいする瞬間だ。

漸く、朝起きてから、今日初めて、逸らすことなく　末松紗唯を見詰めることができた。

様々なメディアを通して、おれは何度も【そういうこと】に触れてきたと思う。

彼らの境遇が遠すぎて、リアルを感じられなかったのかもしれない。

だから、こんな単純なことに、今の今まで気付かなかった。

どんな苦悩を抱えようと、どんな不幸を感じようと　世界が終わる虚無に勝るコンプレックスはない！

俯く横顔は……潤んだ瞳が、今にも溢れ出しそうだった。

「……下手、とか言うなよ」

振り向いた衝撃で　左頬に、ひとしずく零れた。

「おれなりに……頑張るから」

自然に笑顔が零れたような気がするが、水面に映るおれの表情は

漣に呑まれて、はつきり確認できなかった。

そんな気がしたのは　天使が微笑んでくれたからだ。

おれはサイドブレーキを下げた。

ギアをローに入れ、踏み込んだ左足を半クラ状態にして、ブレーキペダルに固定していた右足を緩和させようとした。

エンストした。

3回免許の更新をしているが、たまゝにやる。
でも、これにはれっきとした言い訳がある。

「どうすんだよ、事故ったら」

左手の甲が、温もりで覆われていたからだ。

「おにいちやんといつしよなら、いい」

両足に力を込めた。

「セックスしなきゃ、死にきれねえよ」

ギアを抜いた。

「ここですよっか」

回転音を復活させた。

「車内での飲食及び淫行は禁止されております」

「ピー　ピー」

……音が鳴った。

リバースに入ってもうた。

最近では滅多にやらなくなったのになあ。

頻度的には、給油時にトランクを開けるくらい。

昔は、よくやった。

たぶん前世では、やり捲ってた。

だから恋愛の女神は、おれに枷を嵌めた。

思考能力に長けた種に転生させて　過去に罰を与えるために、

現在にはありもしない罪の意識をでっち上げた。

しかし、その刑期もやつと終わる。

娑婆の空気を、思いつきり　。

「ありがとね」

小さなプレッシャーが押し掛かる左手で、ミッションを掻き回した。

「明日そのセリフを聞けりゃいいけどな」

思わず礼を言いたくなるくらい納得のいくセックスができれば「ありがとう」を聞けるという意味でこう言っただつもりだが、聞き様によつては……というか、このシチュエーションの場合、別の捉え方をするのが自然だろう。

おれの発言は、アホ政治家に匹敵するくらい軽過ぎる。

握る指が、股に入った。

「紗唯も……がんばるから」

15分もアイドリングしたのは、これが初めてで 十分に、あったまつた。

ディナーパーティー

ここに来るのは、初めてじゃない。

だから……ゴージャスなレストルームを見ても、驚かない。

レバーを引くだけで自動的に三角折りができるトイレットペーパーホルダーを見ても、もう驚かない。

金縁の大きな洗面鏡に映った小顔の男に「おまえはここにいてもいいレヴェルの人間だ」と言い聞かせた。

リカと別れて　宝石屋の顧客であることを後悔しかけていたが

……ステータスだけなら、申し分ない筈だ。

オートクチュールで仕立てた50万以上するエルメネジルド・ゼニアのスーツ。

サファイアをあしらった60万くらいのカフス。

袖ボタンのところに切れ目がある59000円のカッターシャツ。

その時一緒に同系色で揃えた29000円のネクタイ。

フレーム＋レンズで45000円の眼鏡。

散髪代17000円の癖毛をセットする38000円のジェル……。

今はまだタイタックだが、いずれジルコンの地位を引き摺り下ろしてエンゲージリングに落ち着くだらう税込み126万（現金一括！）のダイヤモンド。

目立った言動を慎めば、キャッシャーの脇で仁王立ちする黒服を纏ったウエズリー「スナイプス似の用心棒に撮み出されることはないだろう。」

赤い絨毯を歩むツヤ消しの靴も、頗る軽快だ。

流石に「シューフィッター」と豪語するだけのことはある。

田中且行……の知り合いには、感謝しなければならない。

給仕さんに椅子を下げてもらい、おれは席に腰を落ち着かせた。

日常生活に使用人がいないおれは「どうもどうも」といった感じで頭を下げて。

って言うんじゃない。でもあんた、低いのは姿勢じゃなくて身長ですから。残念！ 最上列の棚がレンタルできません、斬り！ 見下ろした窓の外には、いかにも都会チックな光が踊っていた。世界遺産に認定されているドナウ川周辺のような絶景ではないが…… 高級感溢れる雰囲気は、そこそこ漂っている。

カップル用の席が15コ、夜景が愉しめる窓際に配置されている。その内周に、家族用だか接待用だか…… 大きめのテーブルが3つ。床面積の割には、そんなに席数は多くないため、席間が広々としていてゆとりがある。

今し方通り抜けて来た回廊に飾られたホアキン・トレント・リヤドの薔薇の右奥に分岐するVIP専用っぽい扉の向こうにも、セレブな感じの豪華な席があると思われる。

燭台も、おれたちのなんかより何倍もでっかいヤツが並んでいるだろう。

間違いない！

厨房へ続く通路の左手（おれの席から見ても）にささやかなステージが設けられていて、ピアニストらしき女性がささやかな音色を奏でている。

クラシックに造詣が浅いおれにとって、初めて聴く曲だ。

衣装は「ささやか」とは言い難い。

……どこ見てんのよ！

高い天井には写実主義（何となくそんな感じ）の壁画が描かれていて、高そうなペンダントタイプの縦長シャンデリアが5本、葡萄が生っているみたいに吊るしてある。

……絵画にも造詣は深くない。

けど、アルフォンス・ミュシャが描く女性の絵は好き。

タロットカードっぽいのがいい。

聞いたところによると、彼の作品には模作が多いらしい。

……模写と力けてるわけじゃなくて、マジで。

絵画は眼で判断できる価値なんだから、贋物を掴まされても

幸せだと思う。

一生、気付かなければ……。

紗唯は、まだ席に着いていない。

シナリオ通り 準備段階だ。

それを遂行するために、おれは現地まで赴いて予約を入れた。おもむ

前日にも拘わらず、空気があった。

デフレの波がなかなか退かず、バブリーな人間が少ないから……

……おれたちの誕生日が、世間的に【特別な記念日】じゃないからか

……単に暦の上で、平日だからってだけかもしれない。

……って言うか、デカい。

写真よりも、かなり。

まあ……12・1型の液晶画面と比べりゃ、当たり前か。

吹き抜けと言うか、メゾネットと言うか……サーキュラー階段を上ったところに、フィッティングルームがある。

ちょうど、厨房の真上辺りだろう。

紗唯は今そこで、衣装合わせの最中だ。

ホームページで貸し衣装のサービスがあることを知って、利用することにした。

サービスって言うても、ケチなおれが跳び付くような……無料じゃねえけど。

それだけなら電話でも済むが……それだけじゃないから ソレを持参して、昨夜訪れた。

彼らの居場所は、薄暗い箆笥たんすの中じゃない。

多くの人の目に触れることで、美しく輝ける。

これで少しは……元が取れる。

ライバルマリンのプラチナネックレスは、おれ自身が身に付ける機会を生むことができるから、ちよつとずつ減価償却できる。

しかし、女物はちよつと

？

どこを見渡しても……時計がないな。

時間の束縛を忘れさせようという店側の配慮だろうか？

19時47分。

あ、忘れてた。

紗唯が電車で揺られておれに逢いに来たあの日以降、紗唯と会う時は必ずその直前に電源をOFFしてた。

メールはやっているから、送受信の一瞬なら気分を害することはないだろうが、会話中ずっと基地局から送られてくる電波は、繊細な体に支障を来す。

鈍感な本人は、全くその痛みがわからない。

喻えるなら　犬の鼻前で、すかつし尻を放つような……そんな罪悪感。

留守電モードにさえしておけば、長時間の有害電波に蝕まれる心配はないと思う。

しかし、念には念を。

それなのに、今日に限って、何故か、入れっぱなしにしていた。急用が舞い込んでくるのを期待して？
そうすれば、逃げる口実になるから？

覚悟を決めるよ、いい加減。

左手の親指でフリッパを開け、電源を長押ししてから、ケータイを右胸の懷に戻した。

画面が暗転する直前、一瞬着メロが鳴ったような気がするが……ほかつところ。

今これから起こる奇跡よりも重要な事件なんて、おれを取り巻く環境の中では起こり得ない。

窓の外は、既に華やかな街のネオンを着こなしている。

都市圏に於ける【横】への拡がりが飽和状態になり【縦】への意識が強まる近代にあって、この店は超高層建築物とは言い難い。

しかしながら、地上25メートルの夜景は結構ロマンティックだ。高級レストランという雰囲気がそうさせるのかもしれない。

最上階から展望する景色もまた格別だろうが……縁遠い。

食前酒でさえ拒んだおれが、カクテルラウンジなんて……。

それからもうひとつ 最下階にも縁遠い。

ダイニングチェアの下には、何度も耳にしたことのあるブランド
ショップが店舗を列ねている。

ことを、エレベーターの案内図で目にした。

買うつもりじゃなく、ただ見るだけのウィンドウショッピングが
できなさそうな雰囲気なので、このフロアで降りたことはない。

つつつても、まだ2回しか来てねえけど。

……もう、来れないかもしれないけど。

いろんな意味で。

3層の立体駐車場を挟んで、地下にはカジノスペースが設けられ
ている。

本当に空間があるだけで、中はがらんとしているらしいのだが、
実際のところはどうか。

ロバート＝レッドフォードみたいな中年紳士が、連日のように『
幸福の条件』みたく豪遊してんじゃねえのかあ？

……まあ、ここは管制室にいた老健な媼おつなの話を信じよう。

法案が通る前から、設計段階で確保しちゃう店側がすごい。

すごい先見性だったと思える日は、一体いつになるのやら……。

とにかく、この建造物は言わば「高級複合施設」だ。

何はともあれ そこにおれたちは、いる。

後方で老夫婦（たぶん、夫婦）のどよめきが聞こえて、振り向い
た。

着付けの女性（たぶん、そう）に左手を引かれて、右手でゴール
ドの手摺を辿りながら、円形階段を下りてくる。

付き添いは右手でスカートの左腰の辺りを持ち上げながら、半身
の体勢で下りてくる。

それに劣らず、慎重に……プリンセスは履き慣れない不安定なミユールで、一歩ずつ。

細い右足の踝に輝くアンクレットが階段を下りきったところで、髪をやってくれた女性（たぶん）が裾を上げる手を離して、エスコートする手を左から右に持ち替えた。

右は脰脛の辺り、左は引き摺るか引き摺らないかの丈のひらひらスカート。

それとは対照的に上半身はスリムなデザイン。

大胆に露出した肩をシースルーのショールが覆う。

結び目が鳩尾辺りにあって、そこに咲き誇る花が印象的だ。

大きく空いた胸元とのバランスも良く　一際引き立ててくれる。

……いや、谷間じゃなくて。

谷間はなくて……。

淡いブルーのドレスが、テーブルの前に到着した。

「どお？」

裾を上げて、紗唯がゆっくりその場で回転する。

大胆にカットされた背中に、肩甲骨がうつすら浮かぶ。

アップにした髪の下から初めて見る項と金の髪飾りが数秒　そ

して、両鬢の後れ毛が正面を向く。

耳朶の下にも　揺れている。

大人っぽいメイクが、はにかむ。

「いいんでない？」

引いてもらった椅子に、ゆっくりと腰掛けて　ヒロインは一息吐いた。

「座り難そうだな」

腰を浮かせて、何回かポジションを微調整する。

「下のほうがもっこりしてる」

「下のほうがモッコリ言うな」

マメうんちく　ネックレスのことを、韓国語で「モッコリ」と言う。

……クスクスって、笑われた。

「とつてもお似合いですよ」

紗唯だけじゃなく、おれも含まれてるのか……それとも、おれたちの会話が分相応に低俗だったから皮肉っぽく……自らテーブルへ案内したんだから、そこは認めないか。

丁寧に一礼して、コーディネーターは掃けた。

「だって」

微笑は 無邪気だ。

「仕事だから……決り文句だよ」

本当に素敵ならいいが、そうでもない時は……他人を褒める仕事は、おれにはムリだ。

正直ジイさんだから。

「なんか、紗唯じゃないみたい」

右手で取った空のグラスを顔の前に近付けて、16歳の少女が付け睫毛まつげの下から化粧を覗き込む。

アングルをいろいろ変えて、薄い藍色のアイシャドウが何度も瞬きをする。

本当に生まれ変わったんなら……すぐに死が訪れることはない。間もなくテーブルにやって来た女性が、おれのグラスに水を注ぐのを見て、紗唯はグラスを元の場所に戻した。

が、それとは違うグラスにミネラルウォーターが注がれた。

おれは彼女に、同じ物で、何か料理に合う……ソフトドリンクをお任せした。

高級レストランのソムリエールに、ノンアルコールを選ばせる

何て贅沢な起用だろう。

料理もお任せにした。

昨日メニューを見せてもらったが……わからない。

フランス語っぽい筆記体も、その下に訳された日本語の意味もさっぱり。

できあがったカタチが想像できない。

マリネやらズッキーニやらジビエやら……何？ 地名？ 人名？

昨日の時点で、料理長のお奨めコースを注文しておいた。

支配人にご予算を訊ねられて、平均的な額を聞き返した。

椎礼琉の店の 倍の倍の倍くらいだった。

平均なんだから、下はいる。

だから、下回ったって恥じることはないのだが……おれの中の「ええ恰好しいなおれ」が勝手に声帯を奪って……中の中のちよい上くらいの価格設定で、宜しくお願いしてしまった。

これから職を失うって時に……。

いや「失う」とは言わないか。

自ら望んで、時間を創造するわけだから。

紗唯の左手が、グラスに伸びた。

中指の付け根 ちゃんと輝いている。

これで、全て確認した。

昨夜おれが店に預けたパールたちは、今漸く 紗唯に活かされている。

ネックレスとイヤリングのセットが収めてあるいい香りのする桐箱の蓋の表には、誰が命名したのか「花球真珠」と書かれており、その金色の達筆は誇らしげに光っている。

流石に……値が張るだけのことはある。

パールのファッショニングは、デザイナー曰く「指が長く見える」のが特徴らしい。

それにしても……1個だけなのに、こっちの単価が箆棒じやぼうに高いのは何でだろう？

……テツ&トモが、リフレインする。

まあ、いいか。

どうせ……おれの資産じゃねえから。

宝石は、おれ自身の資産じゃないと思っている。

金を出すのはおれだが、おれ自身のために金を遣うわけじゃない。だから、どれだけ金に困ることがあっても売り払うことはしない。

おれが真の価値を知る必要はない。

知らないほうが良かったと、後悔するかもしれないし……。

貰ってくれる嫁さんが喜んでくれりゃ、それでいい。

おれを貰ってくれる嫁さんが現れるかどうか、微妙だけど……。
シャルドネのジュースが、ワイングラスに半分くらい入ったところ
で、滝の流れが止んだ。

赤ワインだったら少しグラスを揺すって、空気に触れさせてから
……今は関係ないか。

って言うか、おれには関係ねえか。

「じゃあ……」

グラスを手に。

「キミの瞳に」とか言おうかなあと思ったけど……日本で5千番目
くらいに似合わない男だと思ったので、止めた。

「……ふたりの誕生日に」

「かんぱあい！」

口元の表情は大きく、声は控えめに 紗唯がグラスを掲げた。

グラスを合わせて音を鳴らすのは、マナー違反……って言うか、
危ねえし。

高いグラスが割れ易い以前に、テーブルの中央にキャンドル灯つ
てるし。

三又だし。

28と16 同じ誕生日なんだから、12コ違いは永遠に変わ
ることなく縮まらない筈だが……数学的計算式で答えが出るほど、
人生は単純じゃない。

金の流れだって、バランスシート上で貸方と借方が合致してい
ても、実質的にはアンバランスだ。

存在しない金が数値として瞬時に動くから……とにかく、数字は

難しい。

おれがジジイになればなるほど　紗唯との差は、離れてゆく。
若いやつの可能性を搾取さくしゅしてまで長生きしようとは思わないが…
…もう暫くは、金を創造する側で頑張れるだろう。

体力はそんなにねえけど、年齢的に。

……早く、仕事探さねえとな。

昨晚おれは、求人情報誌の序でに、テーブルマナーの本を立ち読みしてきた。

どっちが序でだか……書店内に流れる曲が、最新シングルヒットチャートから蛭の光に切り替わるまでの　約1時間半。

思い出せるだけ、頭の中で復唱しよう。

グラスをチンしない　は、リスクいなので実践できた。

先ず、ウェイターが料理を持って来たら……早っ！

やるな、高級。

まあ、24時間前に注文してるからね。

えーと……皿の上にクラウンっぽく飾られたナフキンを取って二つ折りにし、折り目を手前にして膝の上に置く。

紗唯も同じように、する。

おれを手本にするだけじゃなく……周囲を模範にしながら。

「季節の新鮮野菜とシーフードと生ハム、プロヴァンス風で御座います」

固定の皿（テーブルにくっついていてるわけじゃなく、テーブルクロスにくっついていてるわけでもない）に、彩り豊かな皿が乗る。

当然、レディーファーストだ。

料理を出されるのが十数秒遅れたところで、何にも気にならない。だっておれは、ジェントルマンだから。

オードブル　。

善哉ぜんざいは食えないが、前菜は食える。

「きれえ」

ホントだよな。

正に、芸術って感じた。家の畑で作ってる野菜も、料理人次第ではこうなるのか？

いや、赤や黄色のパプリカなんて作ってねえか。

って言うか、料理云々うんぬん以前に、うちのおかんは冷蔵庫の先入れ先出しが 止そう。

こんなことを考えてたら、折角の高級料理が愉しめない。

しかし、ホントに食うのがもったいないねえな。

食わなかったら……金がもったいないねえか。

「キミのほぅがずっと綺麗だよ」なんてセリフは、その時これっぽちも思い浮かばなかった。

椎礼琉んとこのも良くできていたが……やっぱ、一流はスゲエ。

あっちは雰囲気とかからして庶民的だったから、比較するのはおかしいか。

それぞれ、目指すところが違う。

ナイフとフォークは、向かって一番外側から使いましょう だ
ったよな。

……甘エビが……上手いこと……刺さらない。

「おおいし〜い」

……乗っけるのか？

あ、刺さった。

落とさないように……OK。

美味い！

「うん」

のは美味いんだけど、おれ的にはあいつんトコのほぅが……やっぱ、庶民か。

それにしても、紗唯は上手に食うな。

センスかな？

センスのないやつは、団扇……いや、どんどん経験を積んでいかなな。

やっぱ、立ち読みだけじゃ

「デイズニーのだ」

？

クエスチョンマークがおれの額に浮かんだかどうか分からないが……紗唯はステージのほうを向いた。

たんたんたんたんたんスター

たんたんたんたんたんたらん

ジャズっぽいアレンジになっているが、デイズニーのだ。

ピノキオは観たことないけど……いい曲だ。

こういう知っている曲ばかり演奏してくれると、ありがたい。

食事の背景音楽程度で、あんまりじつくりとは聴いてねえけど。

料理で嗅覚と味覚を、BGMで聴覚を、目に映る全てで視覚を満たす。

『星に願いを』か……。

「星にならないでほしい」と、願う。

「鰭鰭」

フ、フカヒレえ〜?!

料理の鉄人で見た記憶がある姿形が、透き通ったコンソメスープに沈んでいる。

スープなんだから、具なんか入ってなくてもいいのに……。

って言うか、中華専用食材じゃなかったのか？

ま……まあ、いいだろう。

手前から掬う。

音を立てずに飲む。

お皿は持ち上げない。

スプーンで掬えなくなった時点で、諦める　とまでは書いてなかったが、雰囲気がそんな感じだ。

適度に残すのがマナーか……ブルジョアだなあ。

メロンパンの端っただけ食って捨てる、みたいな。

……例文が、貧しい。

「おおいいし〜い」

嬉しい。

おれは別に、メシなんて何でもいい。

本当の笑顔が例えホンモノじゃなくても、素直に喜べる鈍感なおれを思いっきり賞讃してやりたい。

ああ、素晴らしきかな！ 永遠なる無知よ。

「うめえ」

玉葱を適当な大きさにカットして茹でたお湯に賞味期限切れの固形コンソメを溶いて、森本家の台所で自分で作ったスープと比べるのもどうかとは思うが……ふかひれのトロトロに到達するまでもなく、このスープのひと口目がメチャメチャう

「クアンパア〜イ！」

っせえぞ、紗唯の後ろのバカップル！

「牛フィレのポワレです。こちらは松坂牛を使用しました」

はいはい、松坂ね。

西武じゃなくて、どっちかってゆうと南部だね、地図上では。

別に驚かないよ、東海三県だし。

「ソースにはイタリア産白トリュフを使用致しました」

世界3大珍味ね。

豚が探すキノコの一種で 【美味】じゃなく【珍味】ってところが……ちよつと、微妙。

給仕の短い蘊蓄を、紗唯は真剣に聴いていた。

嫌味っぽく知識を披露するわけじゃなく、さり気なく紹介して食欲をそそるところが、プロフェッショナルの成せる技だ。

全然力んでないし。

滑舌^{かつぜつ}がキれてる。

ナイフがすんなり入る。

刺したフォークから、肉汁が溢れ出す。

封印されていた旨味が、舌の上で拡がる。

「おおいし〜い」

焼肉屋で食べるふつ〜うのカルビが一番美味いと思っていたけど

……三重県にあったんだよなあ、こんなスゲエ肉が。

テレビで聞いているだけじゃ、口の中で蕩^{とろ}けるという表現が今一ピ

ンとこなかったけど コレか！

殆ど噛まずに、消えて無くなった。

ある意味、詐欺だ。

おれは基本的に、高級食材に好きなものはない。

松茸の香りが嫌い。

蟹の食感が好きじゃない。

鮑に興味はない。

雲丹が食えない。

イクラは以外にもロシア語。

やっぱ、牛はいいね。

日本にイスラム信者が増えれば、需要が減ってお手頃価格でお求めになれるかもしれない。

おれの財布の紐を緩ませるほどお手頃になるには、小売店サイドでかなり勉強してもらわないといけないけど……それ以前に、スーパーから牛肉コーナーが消えるか。

……飛騨牛も有名だよなあ。

そんな遠くないもんなあ。

こっちも、東海三県だし。

これぞ晚餐、って感じがしてきた。

最期の晚餐 紗唯にとっては、そうなるかもしれない。

おれにとっても、恐らくこれが最後になるだろう。

……経済的に。

フランスパンは……あんまり好きじゃない。

味がどうこうじゃなくて、固いから。

顎はそんなに発達していないし、しゃくれてもいない。

日常の食生活から考察すると……カルシウム不足は否めない。

骨密度、ヤバイ。

時間的にも経済的にも食環境的にも あらゆる面から総合的に

評価すると、体に必要な栄養を充分に摂取^{せつしゅ}するのは不可能だから…

…そのうち、サプリメントがおれの主食になりそうだ。

贅^{ぜい}沢な食文化の中で育っているから、食^{じき}を嗜好^{しこう}品に分類することができる。

何とも、幸せな限りだ。

フレンチトーストは好き。

クレイジークライマー……じゃなかった『クレイマー、クレイマー』を初めて見た（テレビの地上波で）後、自分で作ってみた。

おかんの実家から送ってきたバター（森本家の食卓に並ぶ料理には使われないから購入することはないけど、贈与されるなりしたらおれがトーストとかラーメンとかで使わないとなくならない）を^ひ一欠片^{とかけら}低温のフライパンに落として、卵・牛乳・砂糖を混ぜたボールに浸した食パンをすかさず火にかけ、両面を狐色^{きつねいろ}の手前くらいになるまで焼く。

ボールが空になるまで3日連続、朝食（正午前）はフレンチトーストだった。

1リットルのパックも消化しなければならなかったので、飲物はカフェオレにした。

粉末のインスタントコーヒーを少しお湯で溶いて、アイスマルクを注ぎ掻き混ぜる。

手間がかかるので、連休の時にやった。

50連休くらいある　大学生時代の話だ。

行儀よく手で一口サイズに千切って、バターナイフでクリーミーチーズを塗る。

朝食のパンには、いつも齧^{かぶ}り付くけど……。

おれは食パンを耳から食べる人だ。

……いや、最初の一口目という意味じゃなくてね。

真ん中を剥^くり貫^ぬくなんて面倒臭い食い方をするやつは、殆どないだろう。

半分に折るのは邪道だ。

まあ、そんなことはどうでもいい。

おれは新聞の折り込みチラシを敷いてマーガリントースト（バターやジャムよりグラム単価が安いから）を食う。

コーヒ―（もちろん、インスタント）を淹れたカップを右端に置き、肘を突いた左手で持ったA3中央の真上辺りにあるトーストに顔を近付け、四隅の一角から齧^{かじ}る。

食い終わったら、ぼろぼろ零れたパン屑^{くず}を灰皿に捨てて広告を軽く払う。

いい加減　親父にタバコを辞めさせたい。

体の心配をしているわけじゃない。

ヘビースモーカーだったひいばあちゃんは、九拾六まで生きた。

たとえ早死にして、その要因がタバコであっても、そんなことは自業自得だ。

ご親切に「吸い過ぎにはご注意ください」と警告もしてある。

自己管理能力の乏しいやつがどうなるうと、知ったこっちゃない。

おれが言いたいのは「稼^いぎがねえのに、嗜好品に金を遣^やうな！」ってことだ。

おれの稼^いぎが消えるわけではないが、森本家からそんな物が支出項目に計上されることは、遺憾^{いかん}である。

酒・タバコは少々値上がりしても強い意志がない限り辞められないから、すぐに増税のターゲットにされる。

興味のないおれ的には、どんどんバカからの搾取を推進してもらって構わないが、自分がそのバカの血族である事実が立つ。

戸籍謄本こせきとうほんに載っているから、恐らくこの続柄は真実だろう。

98〜148円／4日〜6日（ドリンク代別途）のおれに比べ、現在無職の親父は毎日、88円以上の菓子パンだ。

そうじゃない日は、不確定要素の多い玉打遊戯に行く前のモーニングセット、税込み350円。

他人に金を貸しているおれのほうが、プロレタリアン・ライフを満喫している。

因みに……マンガ喫茶には、行ったことがない。

バイトをしようと思った時期もあったが、マンガ喫茶に、入ったことがない。

【には、行った】と【に、入った】が、係かかってるわけやね。

まあ……こんな話も、どうでもいい。

上品な食べ方をすれば、屑は服とか床とかには落ちない。

皿を洗うだけで済む。

家でも外でも、それはおれの仕事じゃねえけど……。

「本日は御二方の御誕生日と伺いましたので、本日のみ御客様だけに特別のデザートを御用意させて頂きました。一度しかない今宵が、御二方の心だけに共有される良き思い出になれば幸いです御座います」おれたちに一言挨拶してから、フロアマナージャーっぽい男性は厨房の奥へ入って行った。

この辺の感覚が、異質だ。

下々の人々と喜びを分かち合おうという習慣が、上流階級の人間の頭にはない。

この店内で、おれが一番【下】かもしれないってのに……。偶然来店していたパティシエ（自分の店舗を名古屋の栄に構える

専属のアドバイザーで、常駐はしていないらしい）が腕を振るった
バスデーブチケーキが、偶然12月2日に生まれたおれたちだけ
に振舞われた。

全体的にホワイトチョコレートムースでコーティングされた、ブ
ルーベリーとラズベリーとストロベリーとムルベリーとビルベリー
とエルダーベリーのミルフィーユ。

どんだけベリーやねんっ！

サクサクのメレンゲを台にして、アイスクリームやら生クリーム
やらホイップクリームやらが何層にも重なって……食い難いったら
ありやしない。

牙城にフォークを入れた瞬間　芸術は、雪崩^{なだれ}に吞まれた。

ラストオーダーくらい、綺麗に食いたかったのに……。

同じ食べ物を同じ食べる物で食べてるのに、皿の上が空になる過
程の美しさが全然違う。

がさつな姿が「男っぽい」と映っていたら、幸いだけど。

紗唯は、出てくる料理全てに「おいしい」とコメントし
た。

率直な意見だから、しょうがない。

聞き飽きてはいないけど……書き飽きたので、最後のほうはコピ
ーして貼り付けた。

ふたりでシャルドネを1本（750ミリリットルのだと思っ）空
けたところで、ちょうどコースが終了した。

ようだ。

先ほどの着付けの女性が席までやって来て、紗唯を連行していっ
たから。

おれもナフキンをクシャクシャにして、テーブルの上に置いた。
料理……じゃなくて皿を下げに来たウェ이터に、着替えが終わ

るまでここで待つように言われた。

テーブルには、シャルドネが少し入ったおれのグラスだけが残された。

やあ、食った食った。

日頃の少食が幸いして、量的にも堪能できた。

料理の味覚はもちろん、視覚効果もバッチグー。

ファイブスター・ダイヤモンド賞をいつ獲ってもおかしくないような店舗の総合演出。

そして会計も超高級……。

開店早々、ミシユランの有星店評価を得るかも。

まあ、グッドイヤーを履いてるおれにはどうでもいいことだけど、それ以前に、そういうことを思案する環境に全く縁がない庶民だから。

暫くして支配人がおれのところに来て、三品の真珠をどうするか訊いた。

おれは、また後日取りに来ると答えた。

彼は、それまで大切に保管致しますと言った。

でなきゃ、困る。

今後、再び輝ける場所に巡り逢えるかどうかはわからないけど……。

…。

「御会計の方で御座いますが、御支払はどのようになさいますか？」

今日もおれは、食い逃げなんてしない。

なぜなら、ジェントルマンだから。

値段は昨日訊いたので、この場で金額の提示はなかった。

おかげで、二度も驚く必要はなかった。

「コレって使える？」

かどうか、訊いてみた。

昨日訊くのを忘れたから。

老支配人はチェーンの付いた眼鏡を外して首に垂らし、細めた目にカードを近付けた。

「マスターで御座いますね」

あんたもね。

「結構で御座います、はい」

一応キャッシュも下ろしてきたけど……へえ、使えるんだ。

振られたら歌おっかなあゝっと思ってたのに、便所入ってる間にお色直しが終わって、歌いそびれた。

新郎新婦はすぐにラスベガスへ発つ予定だったので、二次会もなく……おれは結婚式の帰りに、ビッケコーで1時間歌った。

独唱で。

それから何日か後に、オリコカード取得した。

DAMが何の頭文字なのか、その時に初めて判明した。

「それでは、あちらへ御願ひ致します」

付き合い始めるちよつと前に、会員になった。

リカはカラオケが好きだったので、重宝した。

室料20%OFFはデカイ 何を考えてるんだ？

おれはそんなに起用じゃない。

……筈だ！

おれがキャッシュシャーカウンターでサインをしているところへ、別ルートから紗唯が辿り着いた。

メイク以外は、入店時と同じ姿 どう見てもジョシコウセイには見えない女性が多数在籍するお店のコが、おれの中ではこんなイメージだ。

鮮やかな口紅の赤は、全く色褪せていない。

その瞬間を、一気に通り越してオトナになっていてくれたら……

一瞬、非現実的未来予想図を描いた。

「ごちそうさまでした」

「どういたしま」

清水章吾とチワワが、過った。

「ボーナスまで待ちな」と同じくらいの言葉尻になってもうた。振り向いたら、紗唯は店員にお辞儀をしていた。

そう言えば……おれは今までに、ボーナスが貰える仕事に就いたことがない。

本来ボーナスは会社及び個人の業績に応じて支払われる臨時賞与で、製造業でもない公務員が伸び悩む税収の中で特別手当の受給資格を有しているという不条理が、おれにはさっぱり理解できない。

因みに おれが取引したことのある消費者金融は、1週間無利息ノーローンだけだ。

……今のところは。

マフラーを返してもらって、^{そび}聳え立つ吸血鬼狩人の脇を通り過ぎた。

昨日洗車した車は、一番上の駐車場（ビルの屋上という意味ではなく、駐車場としてのスペースの中で）に停めてある。

てっぺん取ったとかいう意味じゃなく、用がある店に近いからエレベーターに乗り、3Fを押してから閉ボタンを押した。

B1Fに用はない。

って言うか、まだ営業してねえし。

……ホントに、いつかは賛成多数で可決されるのか？

まあ、ギャンブルにそれほど興味の無いおれ的には、どっちでもいい。

偶に行くのは、趣味ではなく……交際費だ。

カマロに触れないようにトヨタ車のドアを慎重に開けて乗り込みおれはエンジンをかけた。

ランボルギーニの1メートル以上前に1600ccを横付けして、紗唯を乗せた。

「おいしかったあ」

この一時で、一生遊べるプレステ2を貰えるくらいの出費をしたからな。

…… 1人前だけで。

「ごちそうさまでした」

「どういたしまして」

「御粗末さまでした」という返しはできなかった。

おれが作ったわけじゃねえし、そんなギャグを言わせない内容だった。

螺旋を描くように、立体駐車場を下って行った。

「もう1回来ようね」とは 続かなかった。

ディナーパーティー（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

セックスシーンが近付いてきたので【I s a y U（上）】は
とりあえず完結ということにします。

18歳以上の方は、引き続き【I s a y U（天）】をご覧ください。
ださい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4848d/>

I s a y U （上）

2010年10月8日14時49分発行